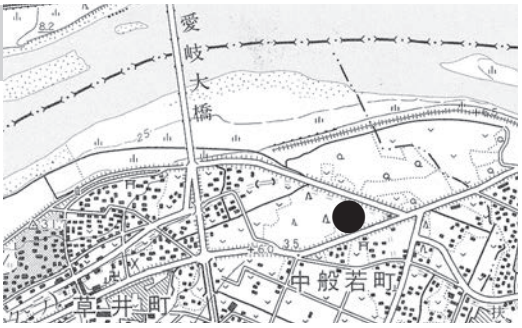
II. 遺跡調査の概要

中般若北浦遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　江南市中般若北浦地内
（北緯35度37分28秒　東経136度89分25秒）
調 査 理 由　木曽川江南防災拠点整備事業
調 査 期 間　令和５年9月～令和6年1月
調 査 面 積　2,000㎡
担　当　者　武部真木・梶田真由



調査地点（1/2.5万「犬山」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局木曽川上流河川事務所による木曽川江南防災拠点整備事業に伴うものであり、愛知県県民文化局を通じた委託事業として、令和５年９月から令和６年１月にかけて実施した。調査面積は、2000㎡である。

立地と環境　遺跡は、愛知県の北部、江南市の北東の端、扶桑町との市境に位置している。木曽川の左岸に立地し慶長13年に築堤が開始された御囲堤の北側に位置している。周辺には郷前遺跡や宮山遺跡など中世の遺物の散布地が所在している。今年度は、調査区を南北にA、B区の２区に分割し調査を行なった。

調査の概要　御囲堤に近い南側のA区と木曽川に近いB区では様相がやや違っていた。A区は流路(080NR、220NR)に挟まれておりその間が浅い凹地や微高地となっており、B区は、調査区の広範囲に流路と河原石が広がる。A・B区の東側は撹乱である。両区から中世の遺構・遺物が確認された。遺物は12世紀から16世紀のものが見つかっている。

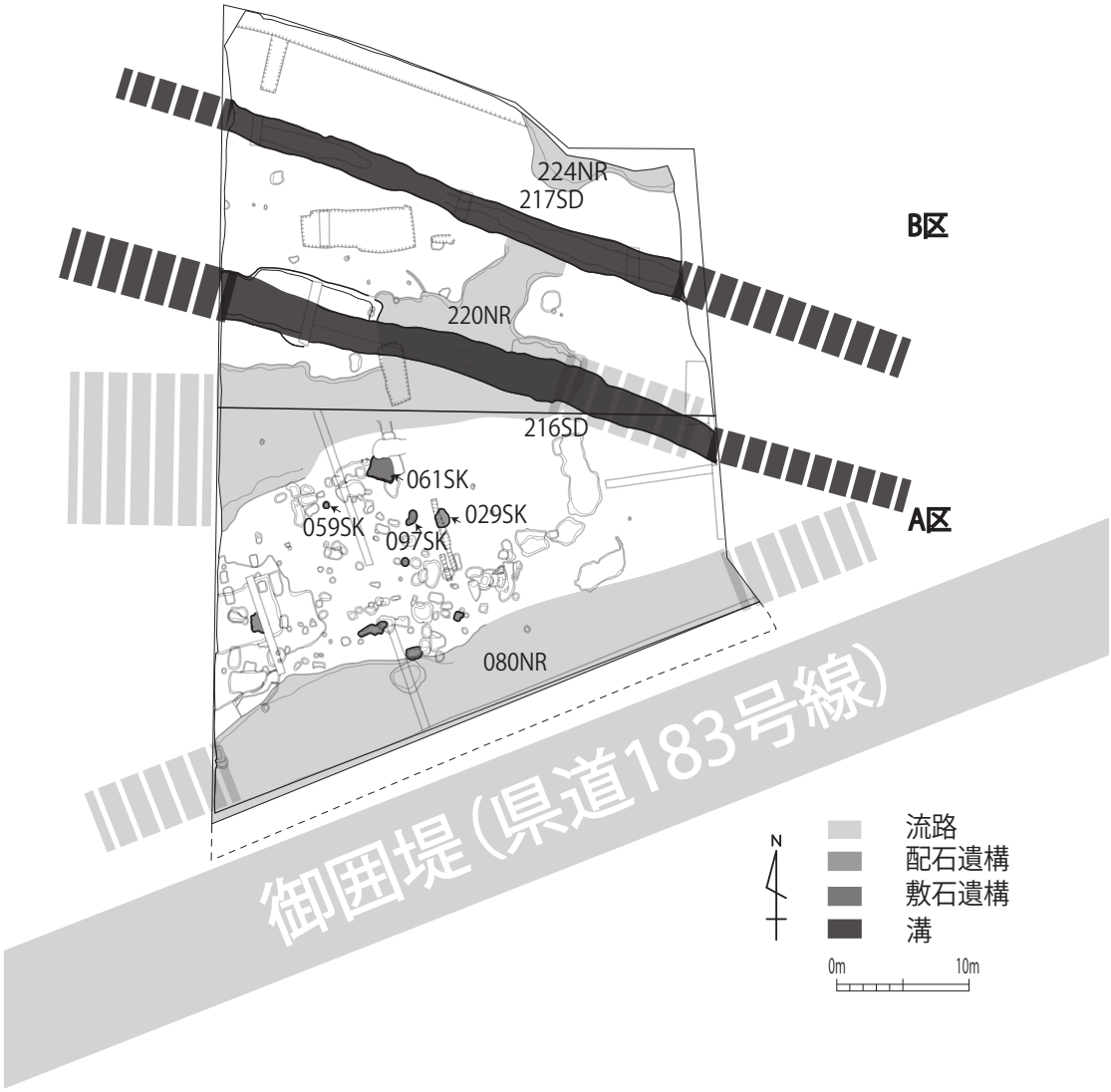
遺構は、A区の微高地ではまとまって土坑が確認され方形、円形、楕円をしており、大きさとしては、1mを超えるような大きな遺構は少ない。また、周辺の河原から選択し、人為的に礫を配置した遺構も複数確認できた。主な遺構は、A区の敷石遺構（061SK）は、1.3×2.5mの範囲に扁平な礫が20個以上並べられている。礫の大きさは、ほぼ同じで20㎝～30㎝程度で、礫を除去した面は平坦であった。配石遺構（029SK）は、直径1.2mの円形の土坑として見つかり中央が少し凹んだ径40㎝の扁平な円礫が中央に据えられ周囲は円礫で支えられている。他にも大型の扁平な円礫が１個置かれている遺構（059SK、097SK）などがある。

B区は溝以外の遺構はほとんど検出することができなかったが、直線的に並行した延びる大型の溝（216SD・217SD）が検出された。調査区のほぼ中央にある216SDは、深さ2.2m、幅2.8m、検出長20m以上である。10m北側で並行に延びる217SDは、深さ1.5m、幅2.3m、検出長20m以上ある。

遺物は、両区から山茶碗（東濃型）、天目茶碗、擂鉢などが出土した。A区の敷石遺構の近くで金属製品や古銭が出土し、B区の溝（216SD）の黒褐色の層から青磁皿、灰釉や鉄釉の皿、土師質鍋、茶臼（下臼）、のほか、灰釉四耳壺や常滑窯産の壺、中国産の青磁短頸壺などの陶磁器が出土している。

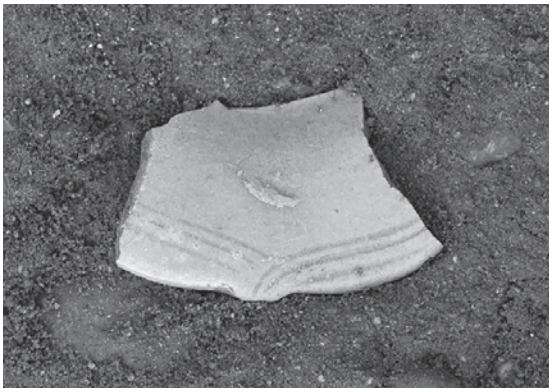
まとめ　今回の調査では遺構・遺物に生活感が乏しく、建物が立ちにくい立地であることと、蔵骨器と思われる陶磁器や古銭などの金属製品も出土していることから墓域としての可能性が考えられる。溝２条の性格は不明であるが軸線方向は、新堤と同じ向きであった。

（梶田真由）



主要遺構配置図(S=1/400)

061SK　配石遺構　（北から）



216SD　青磁皿出土状況（西から）

郷中（ごうなか）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　丹羽郡大口町上小口一丁目地内
（北緯35度20分48秒　東経136度55分03秒）
調 査 理 由　交差点改良工事（一般県道斎藤羽黒線）
調 査 期 間　令和5年5月～8月
調 査 面 積　190㎡
担　当　者　堀木真美子・酒井俊彦

調査地点（1/2.5万「犬山」）

調査の経過　調査は交差点改良工事（一般県道斎藤羽黒線）に伴い、愛知県県民文化局を通じて委託を受けたものである。昨年度は上小口交差点西側と東側の県道沿い北側で 370 ㎡の調査を行い、2 度目となる今年度は、交差点東側の県道沿い南側 190 ㎡の調査を行った。

立地と環境　本遺跡の所在する大口町は犬山扇状地に位置し、遺跡は五条川左岸の沖積微高地上に立地する。昨年度の調査では縄文時代中期後半の竪穴建物 1 棟と土坑が検出され、同時期の縄文土器および石器類が出土している。

調査の概要　今年度の調査では近世から近代の溝が検出され、これに伴う陶磁器類が出土した。また、戦国時代以前の溝と土坑が検出された。戦国時代以前の遺物として須恵器、山茶碗、戦国時代の陶器類などが少量出土した。

近世および近代の溝は主に南北方向に 2 条一組で走り、6 条が検出された。これに直交する東西方向の溝 2 条が検出された。溝より近世末から近代初めの瀬戸窯産陶器（各種碗・皿類、すり鉢、常滑窯産甕）、磁器（皿）などが出土した。遺構に伴わない主な遺物として少量の戦国時代の天目茶碗、すり鉢が出土している。また、近世の溝より規模の大きい北西から南東方向に走る時期不明の溝が調査区西端で 1 条検出された。調査区内で部分的に確認されたため全体の状況は不明である。遺物は出土しなかった。中世以前の時期と考えられる。

まとめ　今回の調査で確認された近世の溝は現存の集落の道路および建物に近い方向をとる。近世以降の屋敷地に伴うものである。調査区のある区域は戦国時代から近世に有力だった丹羽氏の本拠地であり、遺構・遺物はこれに関連するものと推定される。屋敷地の溝とは方向が異なる時期不明の溝は中世以前の集落に伴う可能性がある。　（酒井俊彦）

調査区完掘状況（東から）

近世の溝（南から）

蕎麦田（そばた）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　岩倉市大地町
（北緯35度16分31秒　東経136度51分45秒）
調 査 理 由　道路改良工事（交付金）（主）春日井一宮線
調 査 期 間　令和5年10月～令和6年1月
調 査 面 積　1,028㎡
担　当　者　堀木真美子・酒井俊彦

調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　調査は道路改良工事（春日井一宮線）に伴い、愛知県県民文化局を通じた委託事業である。遺跡は、愛知県埋蔵文化財調査センターが平成 29 年度に 16 ㎡、令和 2 年度に 32 ㎡の試掘調査を行っている。この結果に基づき、今回の調査は遺跡範囲の東から西にかけて A 区 134 ㎡ B 区 59 ㎡ C 区 48 ㎡ D 区 330 ㎡ E 区 245 ㎡ F 区 98 ㎡ G 区 111 ㎡の 7 調査区を設定し、総面積 1,028 ㎡である。調査は B･C 区より開始し、G･F 区、A･D 区、E 区の順序で実施した。また､全て一面調査で基盤面で遺構検出と遺構掘り下げを行った。

立地と環境　遺跡は尾張平野五条川左岸の沖積低地に所在する。古墳時代以前に存在し、遺跡範囲内において南北方向に走る旧河道の後背湿地を中心にして東西に沖積微高地が広がる。遺跡はこの微高地上に展開する。遺跡の南側には大地遺跡が所在する。

調査の概要　調査によって北西から南東方向に走る旧河道に伴う後背湿地が D 区で確認されている。この東側（A ～ C 区）と西側（E ～ G 区）に広がる沖積微高地上で遺構が検出された。遺構・遺物は主に古墳時代、平安時代、近世の 3 時期に属する。古墳時代前半の遺構として A 区で溝 3 条、E ～ G 区で溝 7 条が検出された。古墳時代後半は D・E 区で溝 4 条が検出された。これらは南北方向の溝である。平安時代の遺構としては E 区で南北方向の溝 1 条が検出された。その他、時期不明の南北方向の溝が 2 条検出された。近世の遺構は G 区西端で南北方向の溝 1 条が検出された。遺物は古墳時代の土師器と須恵器、平安時代の灰釉陶器と須恵器が出土した。近世の溝からは瀬戸窯産陶器類などが出土した。

まとめ　古墳時代の遺構として溝のみが遺存している。これらは集落に伴うものである。竪穴建物、掘立柱建物および土坑などは確認されない。後世の土地改変によって沖積微高地が削平され、溝以外の遺構は消失したと考える。D 区の旧河道を中心に東側と西側に古墳時代集落が展開する。平安時代の遺構は溝のみ 1 条が検出され、集落に伴うものと考える。近世の溝は幅が広く、流水の痕跡が認められることから水路ないしは小河川と推定される。（酒井俊彦）

遺跡全景（北西から）

D 区旧河道セクション（北から）

F 区古墳時代前半溝群（南西から）

A 区古墳時代前半溝群（南西から）

G 区古墳時代前半遺物出土状況（西から）

E 区遺構完掘状況（西から）

E 区古墳時代後半遺物出土状況（南から）

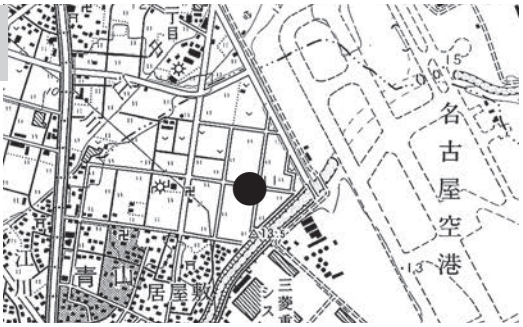
E 区平安時代溝（南から）

E 区平安時代遺物出土状況（北から）

G 区近世溝（北から）

青山神明遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　西春日井郡豊山町大字青山字神明地内
（北緯35度15分40秒 東経136度54分53秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業(一級河川大山川)
調 査 期 間　令和５年５月～令和６年３月
調 査 面 積　6,600㎡
担　当　者　樋上 昇・蔭山誠一・渡邉 峻



調査地点（1/2.5万「小牧」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局河川課による一級河川大山川の中小河川改良事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託を受けて、令和５年５月から令和６年3月に実施した。調査面積は6,600㎡で、豊山町神明公園内の南部を23A区、同公園内の西部を22B区、同公園の西側水田地帯を22C区とする、計3か所に調査区が設定された。

立地と環境　遺跡は、西春日井郡豊山町大字青山字神明地内にある遺跡で、小牧台地の南端付近の低位段丘上に立地する。遺跡の南東側には、北東から南西に流れる大山川が存在する。『豊山町史』によれば大字青山には旧字稲荷の畑地内で銅鏡、旧字北畑地内で縄文土器・石器、旧字居屋敷で土器・石器類が確認されている。

調査の概要　調査は23A区、23C区、23B区の順で行った。

基本層序は以下の通りである。23A区は、公園の造成の盛土の下にわずかな耕作土があり、その下層に褐灰色の粘土質の基盤層がある。23C区は、表土の耕作土の下層に明黄褐色の粘土質の基盤層がある。23B区は、23A区のように公園造成時の盛土の下に耕作土があり、23C区のような明黄褐色の粘土質の基盤層がある。遺構の覆土は、主に中世までの遺物を含む黒褐色の粘土と近世から近代にかけての遺物を含む褐灰色の粘土を確認した。

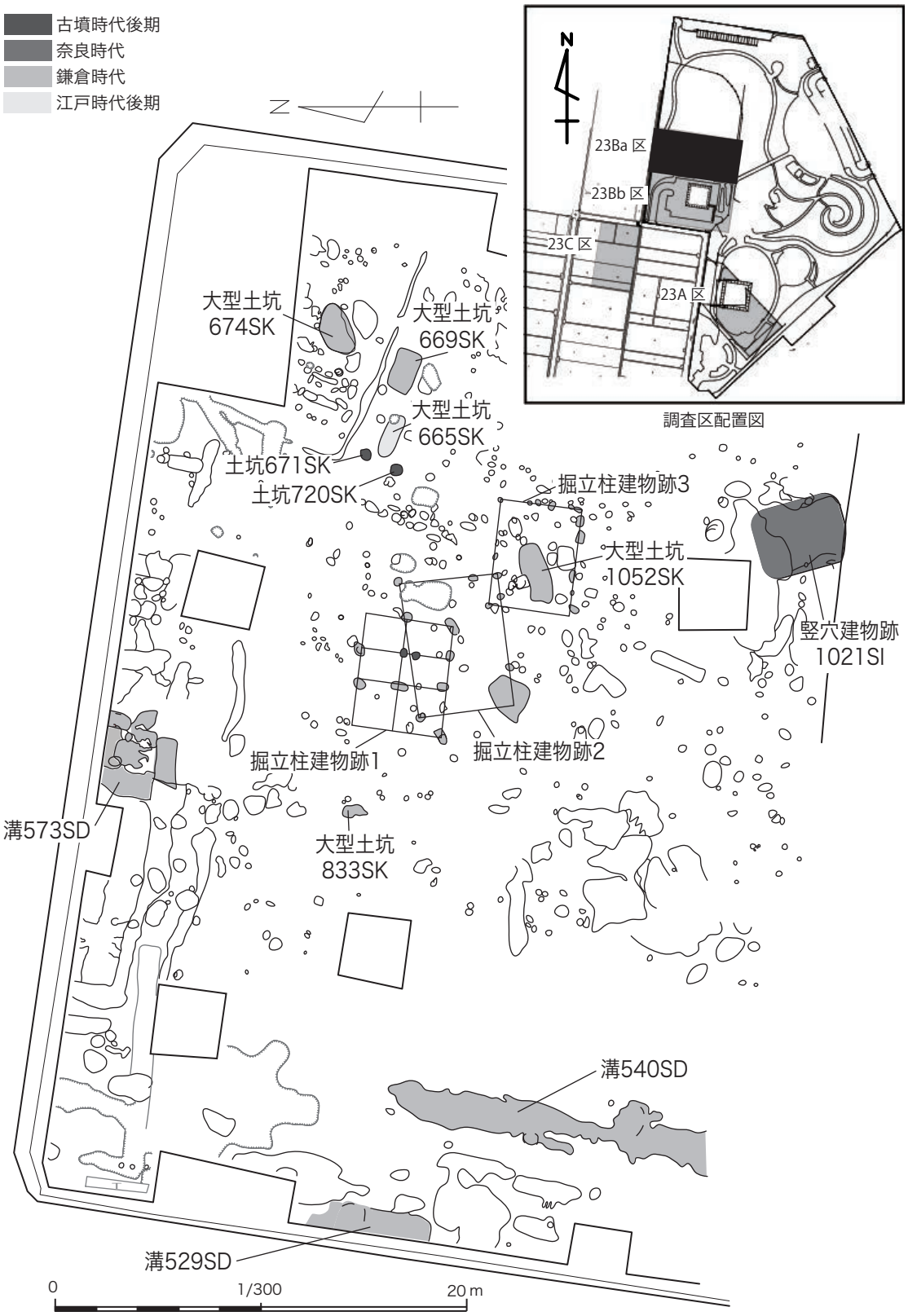
２３Ａ区　23A区では、中世と江戸時代後期から近代の２時期の遺構や遺物が確認された。調査区の西側で確認された旧河道跡178NRは中世の山茶碗などが出土し、その東岸で大小の土坑が13基検出された。178NRは北東から南西に流れており、大山川の旧河道跡の可能性がある。

２３Ｃ区　23C区では中世の溝が５条、江戸時代後期から近代にかけての溝が13条確認され、それらの間を南北に通る道462SFや池411SXが確認された。遺物は、中世以後の陶磁器片が主体であるが、溝301SDからは弥生土器の高杯が出土した。

２３Ｂ区　23B区では、調査区北側の23Ba区で古墳時代後期の土坑が2基、奈良時代の竪穴建物跡が１棟、鎌倉時代の掘立柱建物跡が3棟、南北に流れる溝が３条、江戸時代後期の土坑１基が確認された。その中で調査区南側にある竪穴建物跡1021SIは奈良時代のもので東西2.8m・南北4.0m、平面形は隅丸長方形で柱穴と周溝が確認された。掘立柱建物跡は調査区中央にあり、掘立柱建物跡１は桁行3間、梁間２間の東西棟の総柱建物で、鎌倉時代のものと考えられる。出土遺物は古墳時代の須恵器の杯身・杯蓋、土師器の甕、古代の灰釉陶器や鎌倉時代の小皿や山茶碗の破片が多数出土した。

ま　と　め　以上により、本遺跡では古墳時代後期から鎌倉時代にかけての集落が営まれ、中世から近代には遺跡の南東側を流れる旧河道跡の周辺に集落が展開していたものと考えられる。

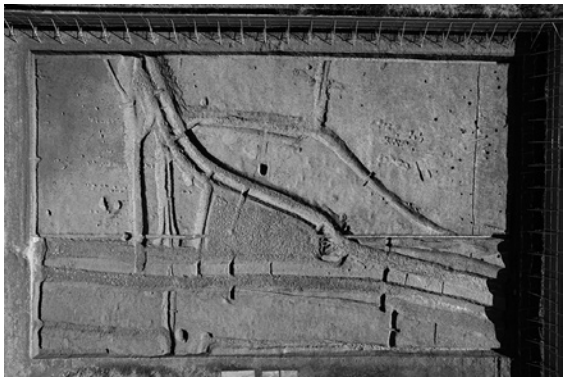
（渡邉峻）



23Ba 区 主要遺構全体図 (S=1/300)

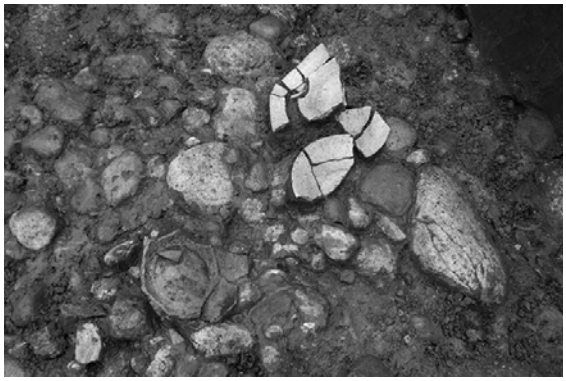
遺跡全景(南西から)

23A区全景(西上から)



23C区全景(西上から)

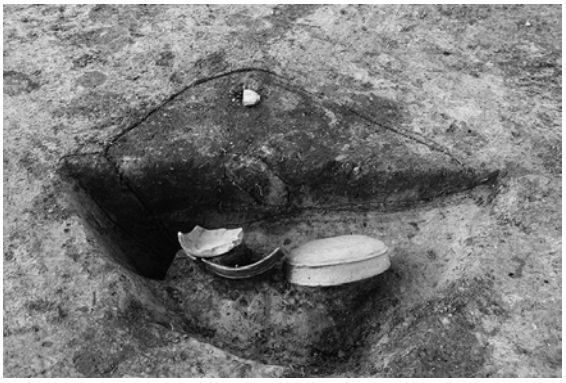
23Ba区全景(北上から)



23Ab区旧河道跡178NR遺物出土状況(東から)

23Ca区溝301SD遺物出土状況(北から)

23Ba区竪穴建物跡1021SI (北から)



23Ba区土坑671SK遺物出土状況(東から)

青山神明遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　西春日井郡豊山町大字青山字神明地内
（北緯35度15分42秒　東経136度54分36秒）
調 査 理 由　愛知県基幹的広域防災拠点整備事業
調 査 期 間　令和6年2月～3月
調 査 面 積　4,000㎡
担　当　者　鬼頭剛・川添和暁・酒井俊彦・宮腰健司

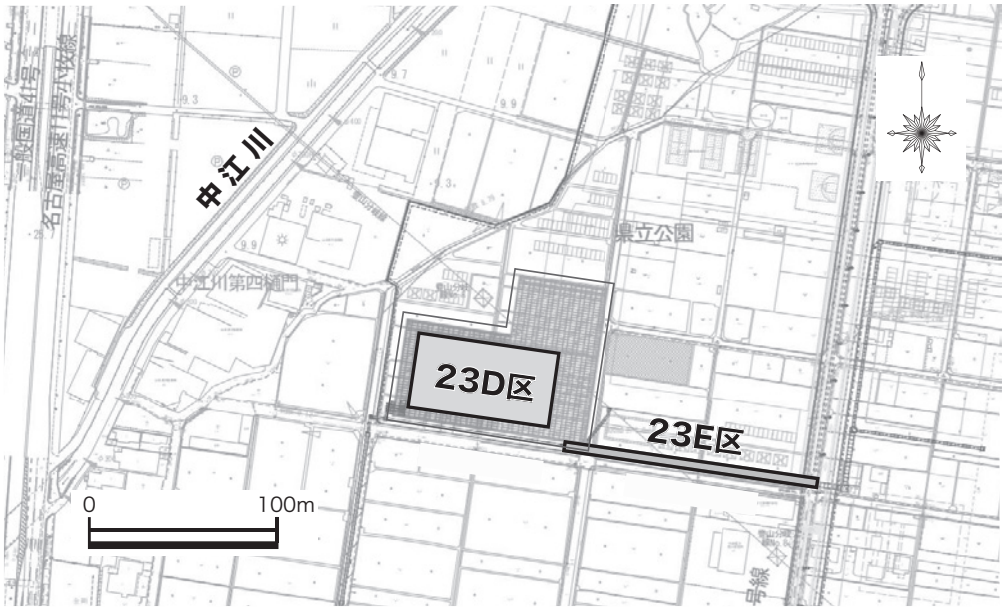
調査地点（1/2.5万「小牧」）

調査の経過　調査は愛知県防災安全局による広域防災拠点（調整池）工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は県営名古屋空港の約0.6㎞西にある。調査面積は4,000㎡で、調整池に関わる23D区、幹線水路に関わる23E区を東西方向に細分して調査を行った。

立地と環境　遺跡は、小牧市および春日井市から連なる上部更新統がつくる低位段丘上に立地する。調査地は段丘の南端にあたり、段丘上を流下する大山川と中江川とに挟まれた堤間湿地内にある。標高は9.5m～10.5mである。

調査の概要　調査対象地では、23D区の中央から西と北西へ向けて地表の標高が次第に低くなるにつれて、遺跡地下の基盤層となる礫層の現れる深度が地表と同じように深くなり、遺跡の北を北東から南西方向に流下する中江川の河岸地形の影響を受けている。一方、23E区の南東や23E区に向かうに従って地形標高が高くなると共に、遺構の密度や遺物の出土量が多くなる。出土する遺物は調査対象地の北西では中世陶器が、東や南東では古墳時代前期に比定される土師器の鉢や中世陶器・近世磁器が出土する。

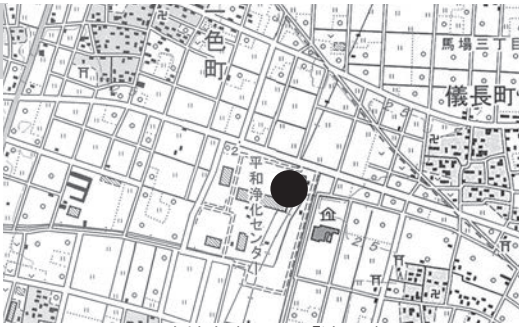
（鬼頭　剛）



調査区位置図（1/4,000）

一色青海遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　稲沢市儀長町1丁目
（北緯35度14分11秒　東経136度45分18秒）
調 査 理 由　日光上流流域下水道事業 水処理施設築造工事
調 査 期 間　令和5年6月～9月
調 査 面 積　440㎡
担　当　者　樋上昇・鈴木恵介



調査地点（1/2.5万「清州」）

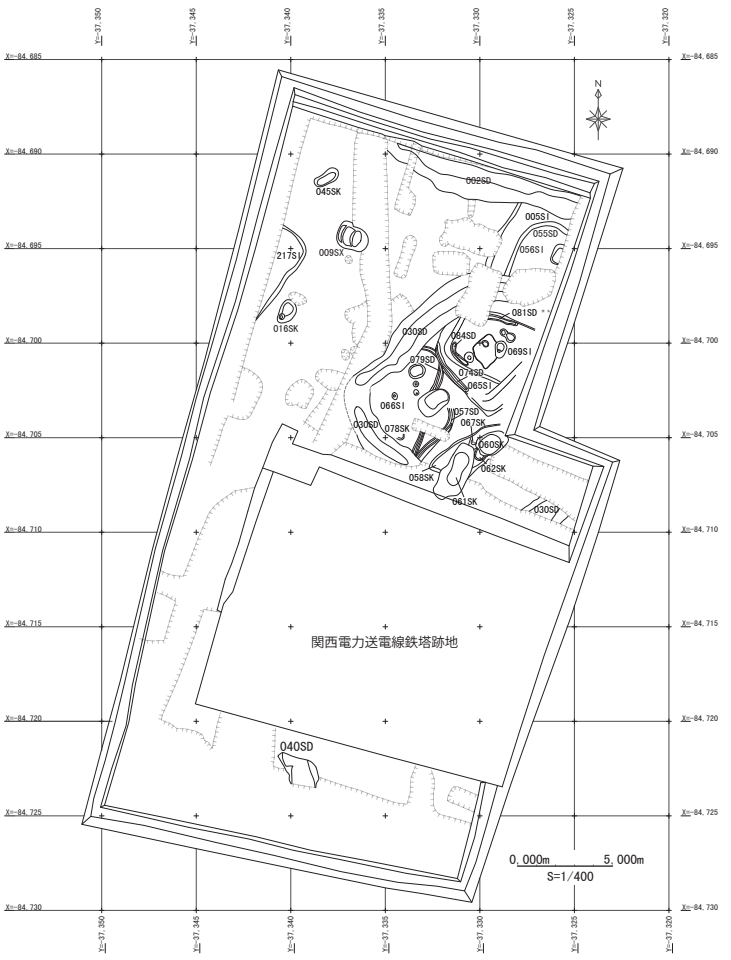
調査の経過　調査は、愛知県建設局下水道課による日光川上流流域下水道事業水処理施設築造工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じて委託を受け、令和5年6月から令和5年9月に実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地である。近代の耕作土を除去した状態を第１面として、鎌倉時代～江戸時代までの主に土坑を中心とする遺構、さらに弥生時代中期後半の方形周溝墓を検出・掘削した。第１面の遺構および包含層掘削後に検出される弥生時代中期後半の竪穴建物跡を中心とする遺構を第２面とした。調査面積は440㎡である。

立地と環境　遺跡は、三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道南岸自然堤防上に位置する。遺跡周辺の現況は主に水田として整備され、大規模な圃場整備によって旧地形は残っていない。現況の遺跡周辺の標高はわずかに北東から南西側に下る地形となっている。地下水位は高く、標高0.8m以下で湧水が発生する。遺構検出面は標高0.7m前後であり、調査には常時排水設備が必須であった。

調査の概要　これまでの周辺の調査結果から、本調査区では、弥生時代中期後半の方形周溝墓や竪穴建物跡の検出が想定されていたが、想定通り方形周溝墓の周溝3条、竪穴建物跡8棟を検出した。方形周溝墓はいずれも隣接する過去の調査区で確認されていたもので、竪穴建物跡は2棟が隣接調査区の連続部分、それ以外の6棟は隣接調査区で未検出、あるいは本調査区で初めて検出されたものである。その他の遺構では焼土や炭化物、土器を多量に含む土坑がある。058SKは竪穴建物跡との切り合い関係が無いため前後関係は不明だが、第1面では検出されておらず第2面の竪穴建物跡と併存したと推定される。竪穴建物跡は、最も下層で検出された065SIと066SIは、遺構検出時の標高が0.5m以下、これより上層で検出された竪穴建物跡 (051SI、053SI：図では記載省略)の検出面の標高は0.7m以上であり、間に整地層と考えられる遺物包含層を挟んでいた。また竪穴建物跡の内、065SIは埋土に炭化物、炭化材を多く含んでおり、焼失竪穴建物と考えられる。

ま　と　め　本調査区では、北半部で検出される遺構が多く、南半部では遺構が少ない結果となった。関西電力送電線鉄塔の基礎部分によって大きく削平を受けるなど後世の影響も考えられるが、過去の調査結果を踏まえた遺構分布によれば、本調査区南半部から03区東端付近にかけて竪穴建物跡の検出されない範囲があり、その範囲では方形周溝墓、中世の土坑群が検出されるのみとなっている。この部分では旧河道400NRが破堤し北から南に向かい流路が形成されたと考えられており、これにより居住域として不適な範囲では竪穴建物跡の検出が減少したものと思われる。

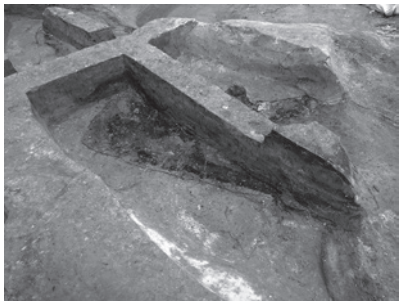
（鈴木恵介）



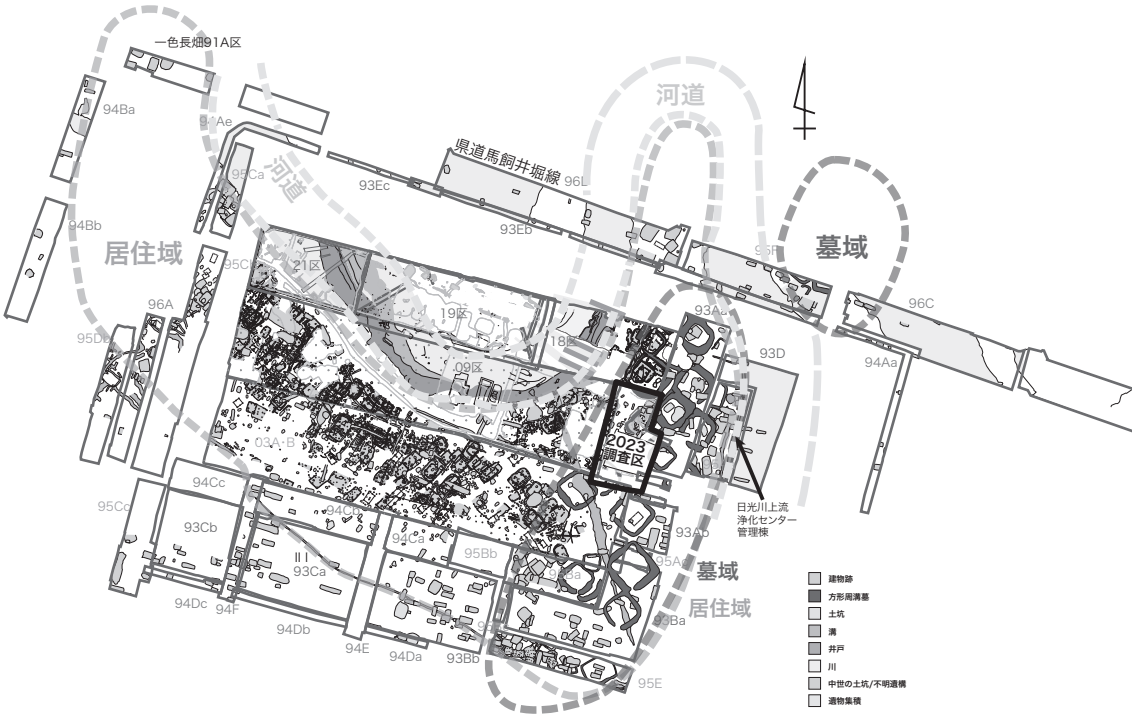
23年度遺構全体図 (S=1/400・弥生時代中期後半)

23年度調査区遠景（西から）

第2面遺構完掘状況（北から）

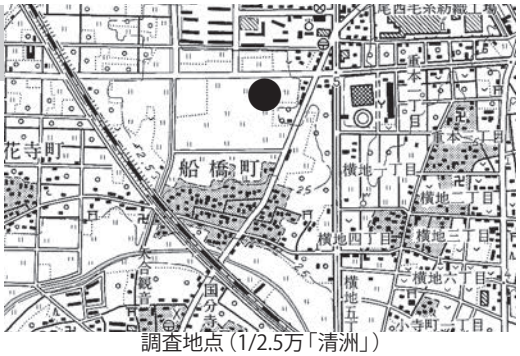


土坑058SK完掘（061SK検出）状況（西から）



遺跡全体図 (S=1/3000)

船橋宮裏遺跡（本発掘調査B）



調査地点（1/2.5万「清洲」）

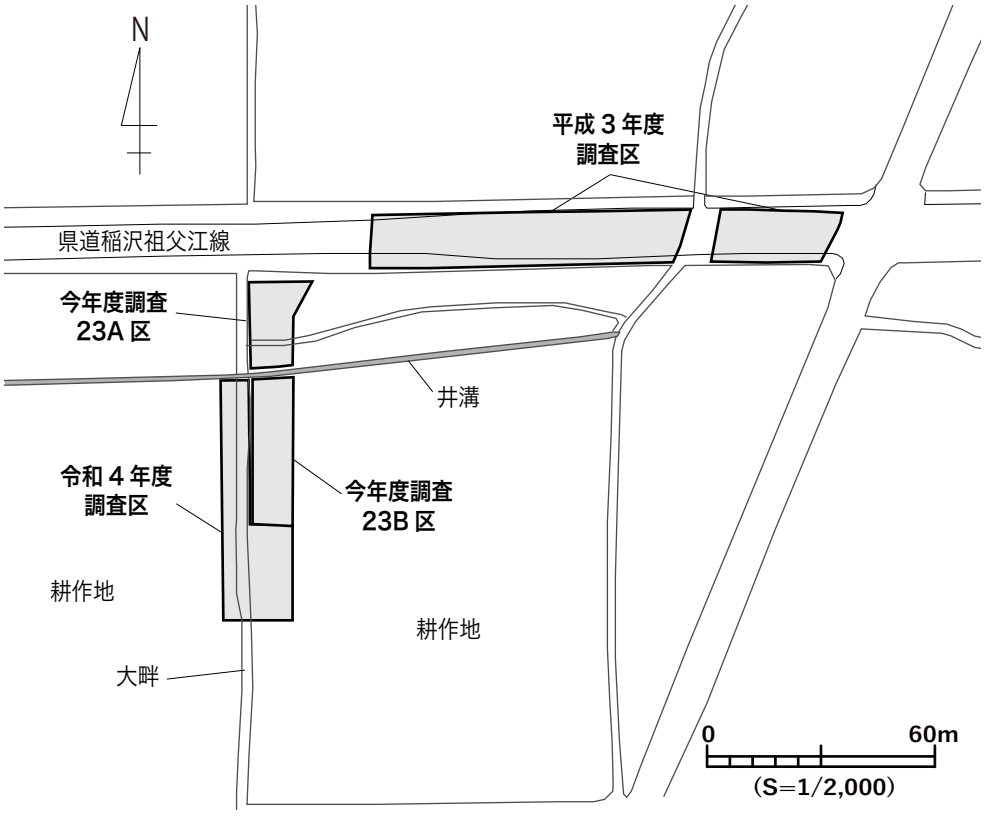
所　在　地　稲沢市船橋宮裏町地内
（北緯35度14分54秒 東経136度46分37秒）
調 査 理 由　道路改良事業(交付金)(一)津島稲沢線
調 査 期 間　令和6年2月～3月
調 査 面 積　570㎡
担　当　者　堀木真美子・荒木徳人

調査の経過　調査は、道路改良工事（交付金）(一)津島稲沢線に伴うものであり、愛知県建設局道路建設課（一宮建設事務所）から愛知県県民文化局を通じた委託事業として、令和6年2月～3月にかけて面積570㎡の発掘調査を行った。

立地と環境　遺跡は、稲沢市の中心部を流れる三宅川の右岸自然堤防上に立地し、現況は水田耕作地となっている。今年度の調査区は工程上の都合により調査区の中央、東西方向に流れる井溝を境に北側を23A区、南側を23B区と設定した。

調査の概要　船橋宮裏遺跡では平成3年度と令和4年度に調査が行われている。平成3年度の調査では多数の土坑群や火葬施設など中世の墓地跡が確認された。一方、令和4年度の調査では地形的に低く湿地状であることから居住地として適さない環境であったため、遺物は出土したが住居遺構は確認されなかった。今年度の調査区は過去の調査区との間に位置しており、集落周縁部の範囲を確認することができた。

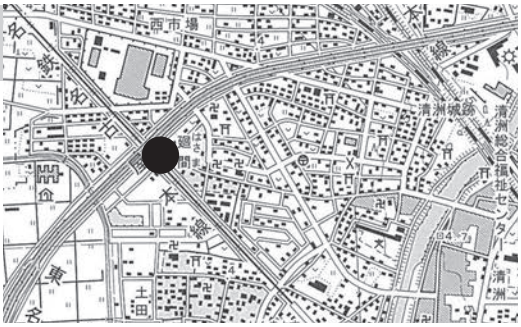
（荒木徳人）



調査区の位置（S=1/2,000）

廻間（はさま）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　清須市廻間地内
（北緯35度13分2秒　東経136度49分45秒）
調 査 理 由　名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事･仮線工事（側道工事あり）
調 査 期 間　令和5年5月～9月
調 査 面 積　720㎡
担　当　者　永井宏幸・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は、名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事・仮線工事（側道工事あり）に伴う事前調査として、愛知県建設局道路建設課（尾張建設事務所）より愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査期間は令和５年５月～９月で、調査面積は 720 ㎡である。

立地と環境　遺跡は清須市の中央西寄り、稲沢市と接する付近、名古屋第二環状自動車道と名鉄名古屋本線が交差する付近に位置する。遺跡は清須市域の東側を南北に流れる五条川右岸の沖積低地に立地する。標高は現況で３m 前後をはかる。今回の調査は、かつて名古屋第二環状自動車道建設に伴う事前調査として実施した廻間遺跡の調査区を挟んだ両側で行った。調査区は北西側に 23 A区、南東側に 23 B区を設定した。

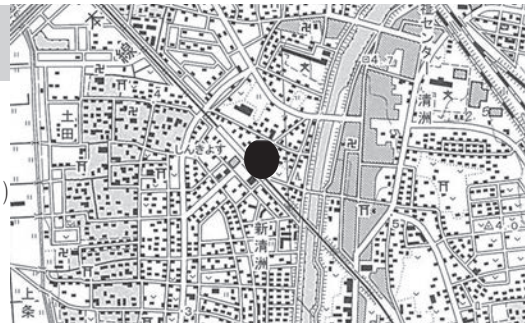
調査の概要　廻間遺跡は古墳時代初頭を中心とする居住域（北側）と墓域（南側）が展開し、今回の調査区はいずれも墓域の北端に位置する。23 A区は既報告C区（松の木遺跡 60 A区）の墳丘墓 SZ04 の西側に隣接する。23 A区では古墳時代初頭の溝を数条確認した。溝は墳丘墓に伴うものとかんがえられる（23Ae 区ほか）。また、これら溝の下位から方形プランの遺構もいくつか検出した。焼土と炭化物が広がる箇所もあり、居住域と墓域が重複する可能性もある。これら古墳時代の遺構面より上位には古代から戦国・近世にいたる遺構群が展開する。23 B区は既報告D区（松の木遺跡 60 D区）墳丘墓 SZ06 の東側に隣接する。23 B区は古墳時代初頭の遺構・遺物はなく、古墳時代後期の溝から須恵器・土師器（宇田甕）を確認した。これらの上位には 23 A区と同様に古代から戦国・近世にいたる遺構を確認した。主に水田関連遺構とかんがえられる。23 B区は旧地形が南東側へ低く傾斜していることから、廻間遺跡の東端に相当すると思われる。　（永井宏幸）

23Ae 区古墳時代初頭の溝（北西から）

23Bc 区調査区より北西を望む（南東から）

清洲城下町遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　清須市清洲地内
（北緯35度12分59秒　東経136度50分10秒）
調 査 理 由　名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事･仮線工事（側道工事あり）
調 査 期 間　令和5年９月～令和6年1月
調 査 面 積　753㎡
担　当　者　永井宏幸



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事・仮線工事（側道工事あり）に伴う事前調査として、愛知県建設局道路建設課（尾張建設事務所）より愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査期間は令和５年９月～令和６年１月であり、調査面積は 753 ㎡である。

立地と環境　遺跡は清須市の中央、清洲公園周辺に所在した清須城を中心に五条川沿いに広がる。今回の調査区は 23 Ａ区と 23 Ｂ区を設定した。いずれも現況で標高３m 前後、五条川沿いの沖積低地に立地する。23 Ａ区は名鉄新清洲駅東口近くに位置し、23 Ｂ区は 23 Ａ区から名鉄名古屋本線沿いに名古屋方面へ約 400m 進んだところに位置する。

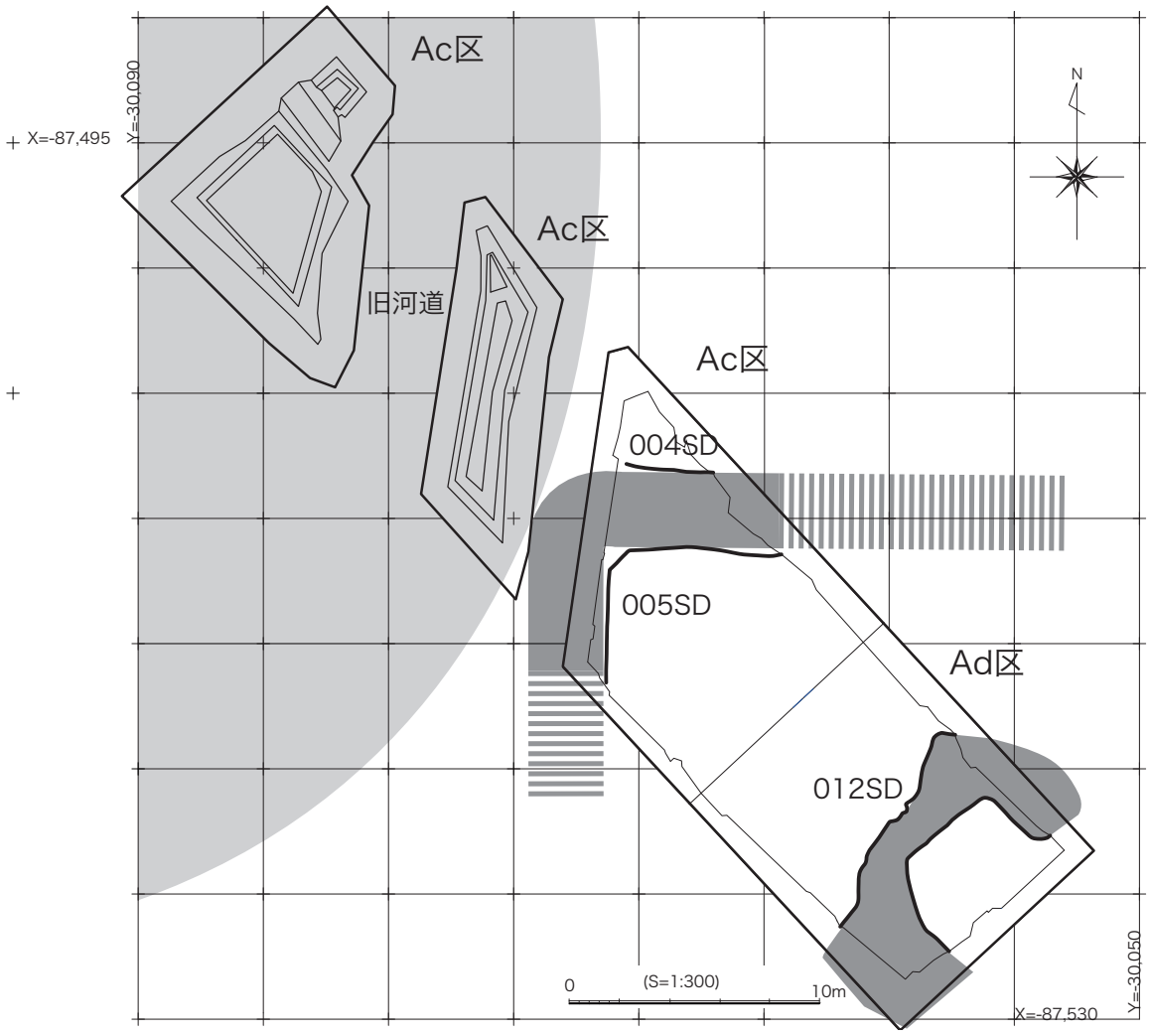
調査の概要　23 Ａ区はａからｄ区に４分割して行った。このうち西寄りの 23 Ａａ区と 23 Ａｂ区は中世から近世の遺物が出土したものの、調査区内は河川堆積が続き、遺構は確認でなかった。今回の調査区北西の名鉄新清洲駅付近にかつて溜池があったことと、23 Ａｂ区より西側は旧地形が北西側に低く傾斜していることから、近世以前は自然流路が南北方向に流れていたと思われる。

23 Ａｃ・ｄ区は北東側で清須市による発掘調査が進められていたことから、戦国から近世初頭を中心とする後期城下町期の遺構が展開すると予想された。ところが調査区の上位は大きく削平されており、旧地表面はすでになかった。したがって、深く掘り込まれた遺構のみが残存していた。Ａｃ区では方位に軸線を合わせた 004SD と 005SD を確認した。当初は別遺構として認識していたが、交差する箇所にトレンチを入れ、層序を確認した結果、同一層序が続くと判明した。004SD は東西軸、005SD は南北軸に延びる。この溝は断面観察から２回掘削されていることが確認できた。規模は現況で 004SD が幅 2.5m 前後、深さ 0.8m を測る。出土遺物は 004SD の最下層付近から土師器茶釜、天目茶碗、志野皿などがまとまって出土した。004SD は東へ続くと予測でき、さらに清須市の調査区では方向と規模が同一の溝があり、接続すると推定される。したがって、004SD・005SD は武家屋敷など規模の大きい区画溝であろう。23 Ａｄ区ではコの字状に屈曲する溝を確認した。周辺に撹乱が多く点在して面的に検出できなかった。各所でトレンチを入れて底面を確認しながら進めると不定形ではあるものの、溝底がコの字状につながった。溝の規模は現況で上位の幅３～４m、底面の幅 1m 前後、深さ 65cm 前後を測る。平面形は内法が約 5m の正方形､外法が不定形を呈する。出土遺物は少ないが、溝底付近から土師器皿、陶器類が出土し、Ac 区 004SD と同時期に相当する。

Ｂ区はａからｃ区の３分割して行った。調査区は県道 127 号（清須新川線）が南北方向へ延びる西側に位置する。現状は県道沿いに宅地が立ち並ぶ。現況地表面から約 1.5m 下に近代以降の水田が確認された。この水田造成時に戦国から近世初期の遺構面は削平

を受けていた。上位は削平を受けていたものの、井戸をはじめ溝や土坑など方位の軸線あるいは美濃路に規制された遺構群を確認した。Ba 区の井戸 026SE は結桶の井戸側が残存していた。これらの遺構はいずれも後期城下町期に相当し、街道沿いに展開した町屋の一角と思われる。

（永井宏幸）



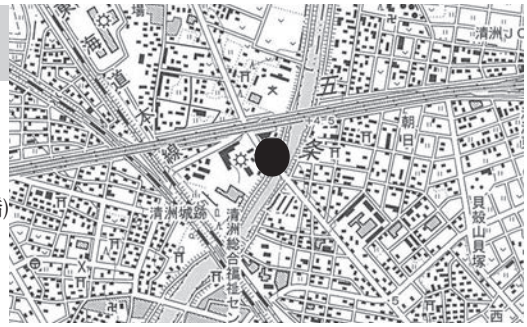
23A 区全体図

23Ac 区より西を望む（東から）

23Ba 区井戸 026SE 井戸側出土状況（北西から）

きよすじょうかまち 清洲城下町遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　清須市一場地内
（北緯35度13分8秒 東経136度50分38秒）
調査理由　橋梁整備工事・総合治水対策特定河川工事（防災安全・緊急対策）(主)名古屋祖父江線(清洲橋)
調査期間　令和6年1月～3月
調査面積　300㎡
担　当　者　樋上 昇・田中 良



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課（尾張建設事務所）による橋梁整備工事総合治水対策特定河川工事（防災安全・緊急対策）(主)名古屋祖父江線(清洲橋)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は、2000年度調査区00B区に隣接した北側にあたり、調査面積は300㎡の2面調査である。

立地と環境　遺跡は、清須市中央部を流れる五条川両岸の自然堤防状の微高地とその後背湿地に広がる遺跡で、今回の調査区(23C区)は清須城天守台跡の北にある北曲輪(北の丸)にあたる。

調査の概要　今回の調査では、戦国時代から江戸時代にかけての遺構と出土遺物が確認された。

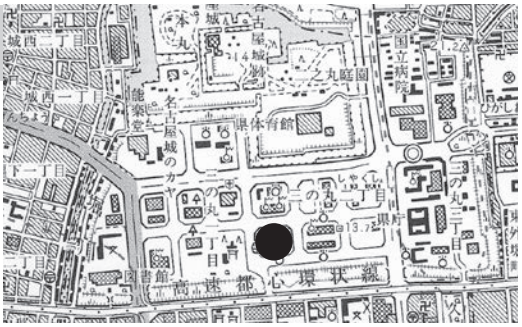
戦国時代から江戸時代前期初頭では、瓦や陶磁器を含む整地層が検出され、同層を掘り込むかたちで多量の瓦を含む瓦溜まり(005SX)や、陶器や内耳鍋を含む廃棄土坑(001SK)などの遺構が検出されている。

さらに、上記の整地層とそれに伴う遺構群の下層には、00B区から伸びる石垣が23C区内にも続くことが確認された。当該地点が絵図などから推測される北曲輪に相当し、櫓状建物の石垣の可能性がある。また、石垣の下層には16世紀の遺物を含む包含層があり、ここからもさらなる遺物の出土が期待される。　(田中　良)

1面目調査区全景（南から）

名古屋城三の丸遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　名古屋市中区三の丸２丁目6-2
（北緯35度10分46秒　東経136度54分05秒）
調 査 理 由　名古屋第4地方合同庁舎整備事業
調 査 期 間　令和5年5月～8月、令和6年1月～3月
調 査 面 積　4,463㎡
担　当　者　永井宏幸・武部真木・梶田真由

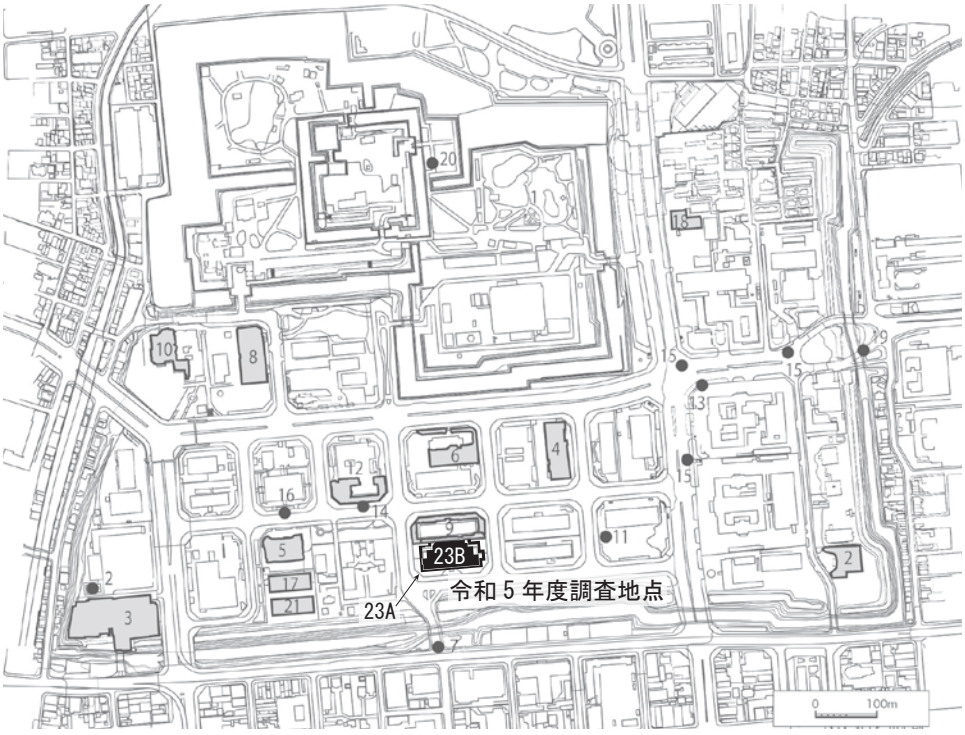


調査地点（1/2.5万「名古屋北部」）

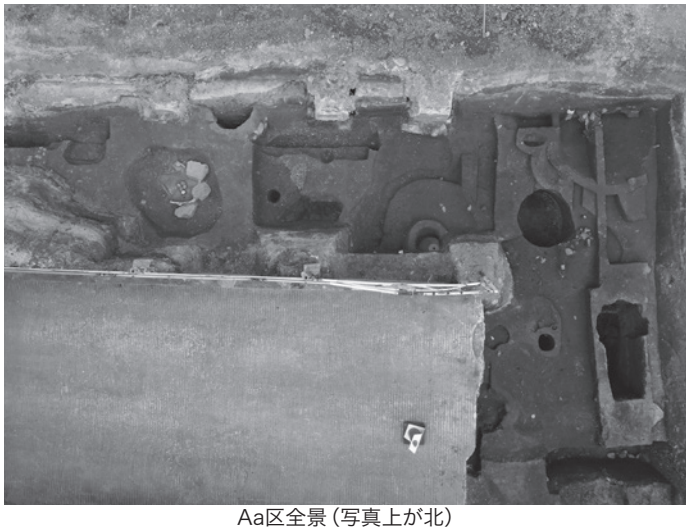
調査の経過　調査は、名古屋第４地方合同庁舎整備事業に伴い国土交通省中部地方整備局から愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査対象地は、旧庁舎建物の周囲で北側中央付近を除く範囲のA区（1,463㎡）と、建物跡の範囲のB区（3,000㎡）である。まずA区の調査を令和５年5月～8月の期間で実施し、その後、建物基礎など構造物の撤去工事の進捗に合わせて、令和６年1月～３月の期間でB区の調査を行った。

立地と環境　遺跡は名古屋台地の北西端付近に立地する。名古屋城築造時に本丸・二の丸の南側に配置された三の丸の範囲が遺跡とされている。これまでに20カ所を超える調査が行われ、尾張藩上級藩士の屋敷地に関わる江戸時代の痕跡ばかりでなく、旧石器時代から戦国期までの遺構・遺物、近・現代の旧陸軍関連施設の痕跡が検出されている複合遺跡である。

調査の概要　表土、近・現代の整地土層（撹乱）を除去し、江戸時代の包含層が確認されたAa区とAb区北側については上・下面で調査を行った。Ab区南側、Ac,Ad区では撹乱を除去して黄灰色粘土質土の基盤層（熱田層）を検出面とした。A区上面検出面が標高12m前後であるのに対して、B区での検出面標高は8.5m前後であり、熱田層の砂層および黄白色の粘土層中で井戸と大型の溝を確認した。

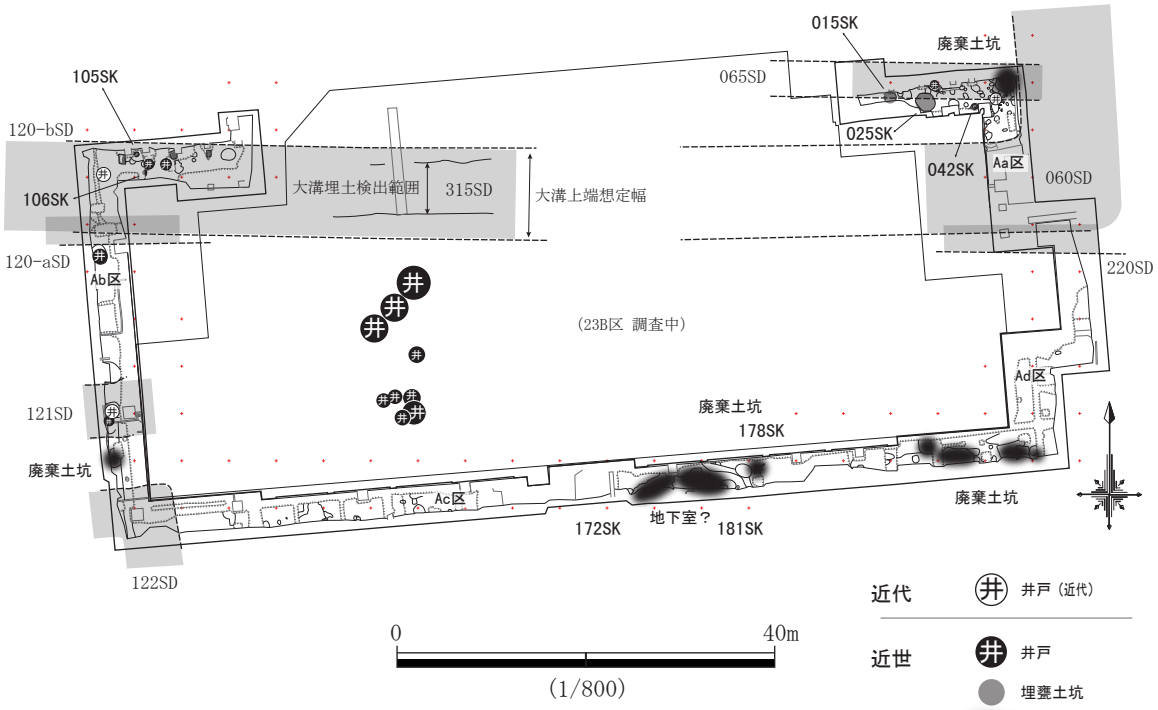


調査地点位置図（数字のあるものは過去の調査地点）



Aa区全景（写真上が北）

埋甕遺構025SK上部構造（北から）



水琴窟015SK断面（西から）

埋甕遺構042SK検出状況（北から）

23A･B区主要遺構配置図（縮尺1/800）

検出された主な遺構には、戦国時代の溝7地点、近世の井戸5基、埋甕遺構5基、池状遺構、廃棄土坑多数、近・現代の井戸2基がある。

戦国期　戦国期の溝はV字状の断面となる薬研堀のタイプが、少なくとも5か所で認められた。065SD・121SD・122SD・120-aSD・220SDは、これまでの調査事例によれば規模が深さ2.5m前後となる方形屋敷地の区画溝と推定される。これらとは別にAa区で確認された060SDは、北側に隣接する旧調査地点から延びる深さが5m前後となる大型の溝（堀）であり、今回の調査範囲東端で西へ屈曲することが明らかとなった。西側のAb区では120SDが検出され、別の溝の重複があるものの上端で幅12m前後となる。B区の調査ではこの大型の溝（堀）の下部（315SD）を検出し、最深部の標高は7.5m前後であった。調査区を東西に横断する巨大な区画溝は北側から短期間で埋められた状況が埋土断面から看取され、北側に土塁が存在したと考えられる。また、断面V字状の溝（120-aSD・220SD）より新しいことを確認した。

江戸時代　絵図によると、今回の調査地点は南辺に門をもつ武家屋敷の屋敷裏に相当する範囲であり、屋敷地を東西に分ける境界がB区中央付近に想定される。東側の屋敷地の遺構は、Aa区を中心に井戸筒を漆喰で作る井戸1基、土坑内に18〜19世紀の常滑窯産甕を天地逆にして据えた埋甕遺構3基（015SK・025SK・042SK）、Aa区の廃棄土坑（001SK・002SK）と廃棄土坑に転用された大型の地下室、南側Ac区、Ad区の大型の廃棄土坑（172SK・181SK）などがある。埋甕遺構のうち025SKは景石を配した漆喰の導水部分と水門、5個の玉石が置かれた上部構造をもち、水門から繋がる植木鉢や常滑窯産甕が埋設された下部構造とセットで確認された。015SKでは甕の内側にさらに湛水を意図した下部構造が検出されており、排水時の反響音を楽しむための「水琴窟」であった可能性が考えられる。埋甕遺構にも用いられているが、周辺の廃棄土坑からも様々なサイズの植木鉢が多数出土している。

西側の屋敷地で見つかった遺構は、常滑窯産の井戸筒を数段重ねて井戸側にした大型の井戸2基（102SE・104SE）、他に2基の井戸と埋甕遺構が2基（105SK・106SK）、廃棄土坑1基がある。このほか、Ab区北西部には人為的に施された白色粘土層が分布する範囲があり、屋敷内に設けられた庭園の池底の痕跡の可能性が考えられる。

近・現代　近代陸軍関連の施設と思われる建物煉瓦基礎、井戸側を明褐色の漆喰でつくる井戸などが確認された。

まとめ　戦国時代那古野城の時期の遺構はこれまでにも注目され、方位・規模などから先後関係やその性格について検討が加えられてきた。今回確認された060SD・120SDと315SDから復元される突出した規模の遺構は、過去の調査において北側に隣接する三の丸庁舎地点と西へ170mほど離れた簡易家庭裁判所地点で確認されており、それぞれ西側と北側に土塁が想定されている。那古野城の時期の中心域の南限を画する施設であるのか、重要な資料を新たに加えることとなった。

三之丸武家屋敷のうちでも本町門に近い今回の調査地点は、重臣クラスの広大な屋敷地が立ち並ぶ一画であった。西側の屋敷地は家老職を代々勤めた渡辺家が近世を通じて居住し、埋甕遺構が複数設けられていた東側の屋敷地は、18世紀後半から幕末まで横井家が居住したとされる。これまでの調査事例から、屋敷裏は日常的あるいは引越しの際の廃棄土坑が設けられる空間との認識であったが、必ずしも一様ではなく、重臣屋敷地においては庭園を設けたり、当時流行した園芸趣味のスペースであったりと、階層等により空間の利用状況が異なることが明らかとなった。（武部真木）

Ab区遠景（東から、奥は護国神社）

102SEの井戸筒（東から）

土坑181SK上層 遺物出土状況（北西から）

土坑178SK遺物出土状況（北西から）

戦国期溝065SD完掘状況（東から）

戦国期溝122SD断面（北西から）

戦国期溝120SD上部断面（東から）

戦国期溝120SD下層断面（東から）

寄島遺跡　姫下遺跡　寄島・姫下遺跡
姫下・向田遺跡　向田・亀塚遺跡（本発掘調査A）

所　在　地　安城市小川町・東町・桜井町地内
（北緯34度54分35秒～55分18秒
東経137度05分43秒～05分56秒）

調 査 理 由　中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)

調 査 期 間　令和4年6月～令和5年2月

調 査 面 積　480㎡

担　当　者　堀木真美子・河嶋優輝・池本正明

調査地点（1/2.5万「安城」50%縮小）

調査の経過　調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査面積は計480㎡である。

調査地点は現市道下および鹿乗川とそれに平行する水路間の堤防部にあたり、現市道下は2.5m×2.0m、堤防部は6.0m×3.0mのトレンチを設定して調査を行った。

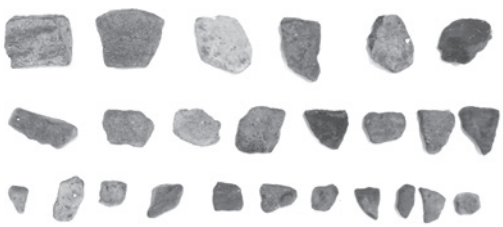
立地と環境　遺跡は、鹿乗川と西鹿乗川が合流する地点から南方の加美橋地点まで約1.4kmの範囲に点在し、南北には碧海台地東縁に沿って鹿乗川流域遺跡群が展開する。

寄島遺跡　トレンチ6か所を設定し、南からTT01～06とした。遺物包含層は確認できなかったが、TT04・05では基盤層上面で遺構を確認した。遺物はTT05から土器小片が1点出土した。

姫下遺跡　トレンチ8か所を設定し、南からTT01～08とした。既往調査で弥生時代～古代とされる流路跡が検出されたTT05・06を除き、全トレンチで遺物包含層が確認された。遺構はTT01～03、TT05・06で検出された。遺物はTT02・07を除く全てのトレンチで出土し、土器、灰釉陶器、近世陶磁器がある。

寄島・姫下遺跡　トレンチ17箇所を設定し、南からTT01～17とした。造成土が厚いためTT16を除いて基盤層らしき層に到達できず、遺物包含層・遺構も確認できなかった。遺物はTT01・03・05で土器・陶磁器小片が少数出土したが、遺構に伴うものではない。

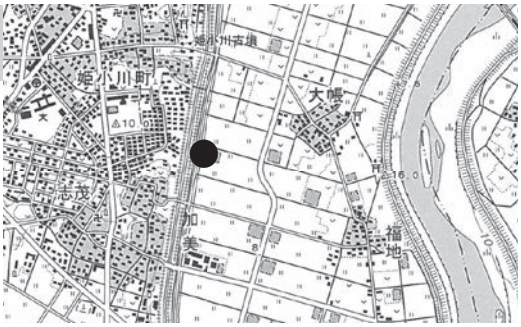
（河嶋優輝）


姫下遺跡 TT08 出土土器

本発掘調査 A トレンチ位置図

寄島（よせじま）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　安城市小川町地内
（北緯34度54分42秒　東経137度05分46秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（一級河川鹿乗川）
調 査 期 間　令和5年5月～6月
調 査 面 積　860㎡
担　当　者　堀木真美子・河嶋優輝・池本正明



調査地点（1/2.5万「安城」・「西尾」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局による鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じて委託を受けて行った。調査区は鹿乗川左岸の市道となるが、横断する農道と排水路を切り回す都合上、5区に分割して実施した。南から順に23A区～23E区となる。

立地と環境　遺跡は鹿乗川流域遺跡群（南群）の一部を構成している。地形的には碧海台地東側縁辺に位置する沖積低地中の微高地となり、調査区地表面の標高は約8.3mを測る。

調査の概要　今回の調査は、平成24年度調査区12A・B区の西側に接する位置となる。いずれの調査区も市道下の細長い形状となる。検出された遺構は、弥生時代終末期～古墳時代に属するものが主体となる。調査区の幅が限定されており詳細は不明確だが、A～D区では竪穴建物が6棟程度存在する見込みとなる。また、最も北側のE区は、調査区のほとんどが旧河道となり、方向的には台地を開析する小河川の可能性が考えられる。ここからは中世以降の遺物を若干採集している。（池本正明）

23B・C・E区全景（北から）

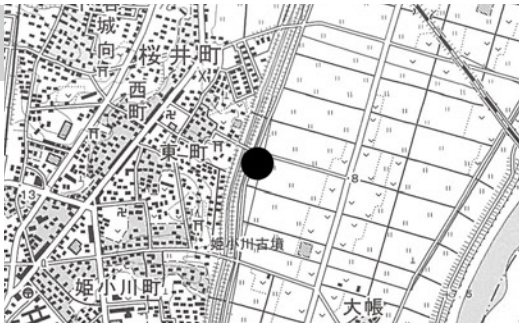
23B区1020SI（北から）

C区2015SP出土状況（北から）

23E区旧河道（北から）

向田（むかいだ）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　安城市東町秋葉下
（北緯34度55分06秒 東経137度05分52秒）
調査理由　中小河川改良事業(一級鹿乗川)
調査期間　令和5年12月
調査面積　55㎡
担　当　者　堀木真美子・河嶋優輝・池本正明



調査地点（1/2.5万「安城」）

調査の経過　調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査面積は55㎡である。本遺跡ではこれまで平成29年度・令和元年度・同4年度に本発掘調査Bを実施し、今回で4度目となる。今年度は令和4年度調査区の北側に隣接する地点で調査を行った。

立地と環境　遺跡は矢作川下流域の鹿乗川左岸の沖積地に立地する。北には鹿乗川流域遺跡群の北群、南には向田遺跡を含む南群が広がり、西方の碧海台地上には桜井古墳群が展開する。

今年度調査区の南方で行った平成29年度調査では中近世・古墳時代初頭～前期の2時期の遺構面が確認され、完形の甕が出土する土坑などが確認されているものの、今年度調査区の東に隣接する令和元年度調査区、および南に隣接する令和4年度調査区では遺構が確認されておらず、沼地や河道であったと推測されている。

調査の概要　調査区南半には現代の盛土がなされており、その下には現代の堆積層が確認される。地表面下約0.8m、標高約7.3mで灰色砂質シルトの基盤層が確認され、更に0.1～0.3mほど掘り下げると灰色極細粒砂の堆積に変わる。

地表面から基盤層の間に遺物包含層は確認できなかった。基盤層上面で遺構は検出できず、調査区西側に時期不定の畦畔と思われる堆積が見られるのみである。調査区西側に方形の掘り込み、中央部に隅丸方形の掘り込み2基、東側に深い落ち込みがあったが、プラスチックごみの出土や層序から、全て近現代の撹乱と考えられる。また、基盤層に2m×2mのトレンチを設定し下層確認を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

遺物は、撹乱土中から土器または土師器および山茶碗、近世陶器の細片が出土した。

まとめ　今年度調査区の範囲では遺構は確認できなかった。基盤層に関しては、遺物が出土しないため時期は不明であるものの、南に隣接する令和4年度調査区と同様、河川による堆積と考えられる。

（河嶋優輝）

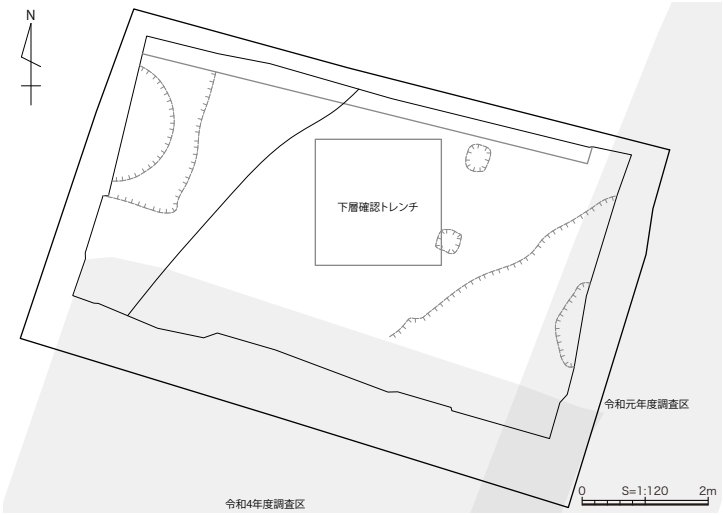


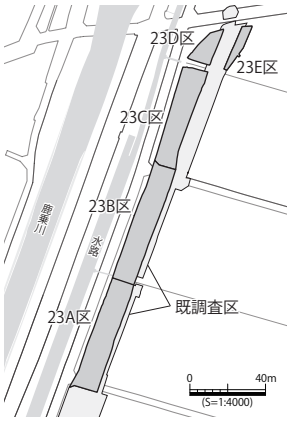
図1　調査区平面図　S=1/120

亀塚（かめづか）遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「安城」）

所　在　地　安城市桜井町地内
（北緯34度55分16秒 東経137度05分56秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業(一級鹿乗川)
調 査 期 間　令和5年6月～令和6年2月
調 査 面 積　2,605㎡
担　当　者　堀木真美子・河嶋優輝・池本正明

調査の経過　調査は愛知県建設局河川課による中小河川改良事業(一級鹿乗川)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡では1970年代に安城市による発掘調査が行われたほか、平成28年度以降、愛知県埋蔵文化財センターが断続的に本発掘調査Bを実施しており、今年度で5度目となる。今年度は、大橋南東から2016年度調査区の北端まで、現市道部の東に隣接する帯状の範囲を主に調査した。調査区は南から23A～23E区に区分し、23A区はAa～Ac区、23B区はBa～Bc区、23C区はCa・Cb区に細分した。調査面積は計2,775㎡である。



23 年度調査区配置図
S=1/4000

立地と環境　遺跡は碧海台地東縁部から沖積地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部であり、遺跡群の北群の南端部に位置する。

調査の概要

２３Ａ区　23A区では、南部で東西方向の旧流路00003NRを確認した。これは東に隣接する19区や西方で実施された安城市第一次調査でも確認されていたもので、深さは1m以上、幅は約15mを測る。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を多量に包含する。出土遺物は土器、木製品があり、土器には甕、壺、高坏、器台、鉢、浅鉢、ミニチュア土器、土玉、手焙型土器がある。木製品には杭、又鍬、掘立柱建物部材、竪杵、竪櫛などがあり、流路の南側斜面では杭列も確認された。

00003NRの北側、23A区中央部では竪穴状遺構3基および無数の土坑、溝を検出した。出土遺物は弥生時代末期から古墳時代初頭を中心とし、古墳時代前期の遺物は00003NRの北岸より北では確認されていない。竪穴状遺構では明瞭な柱穴が確認できなかったため、住居とは断定できないが、生活空間であったものと推定される。

竪　櫛　00003NR出土竪櫛は長さ約109mm、幅約50mm、厚さ約6mmで、板材から削り出したものである。ムネ部の一端が欠ける以外は完存する。ムネ部の線刻は、歯を束ねて製作する結歯式竪櫛を模したものであり、線刻部や凹部には赤色顔料が遺存する。顔料は蛍光X線分析により水銀朱であることが確認されている。

２３Ｂ区　23B区の北側では23A区中央部と同様に竪穴状遺構と土坑、溝が展開するほか、掘立柱建物跡も確認される。23A区同様に竪穴状遺構では柱穴を確認できなかった。出土遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭が中心であるが、23A区と比べて弥生時代後期に属すると思われるものが多く、弥生時代中期に遡る遺物がまとまって出土する遺構が数基（2246SD等）存在する。

大型方形周溝墓　23A区北側から23B区南側にかけては、00012SX(23A区側)、2130SX(23B区側)と呼称

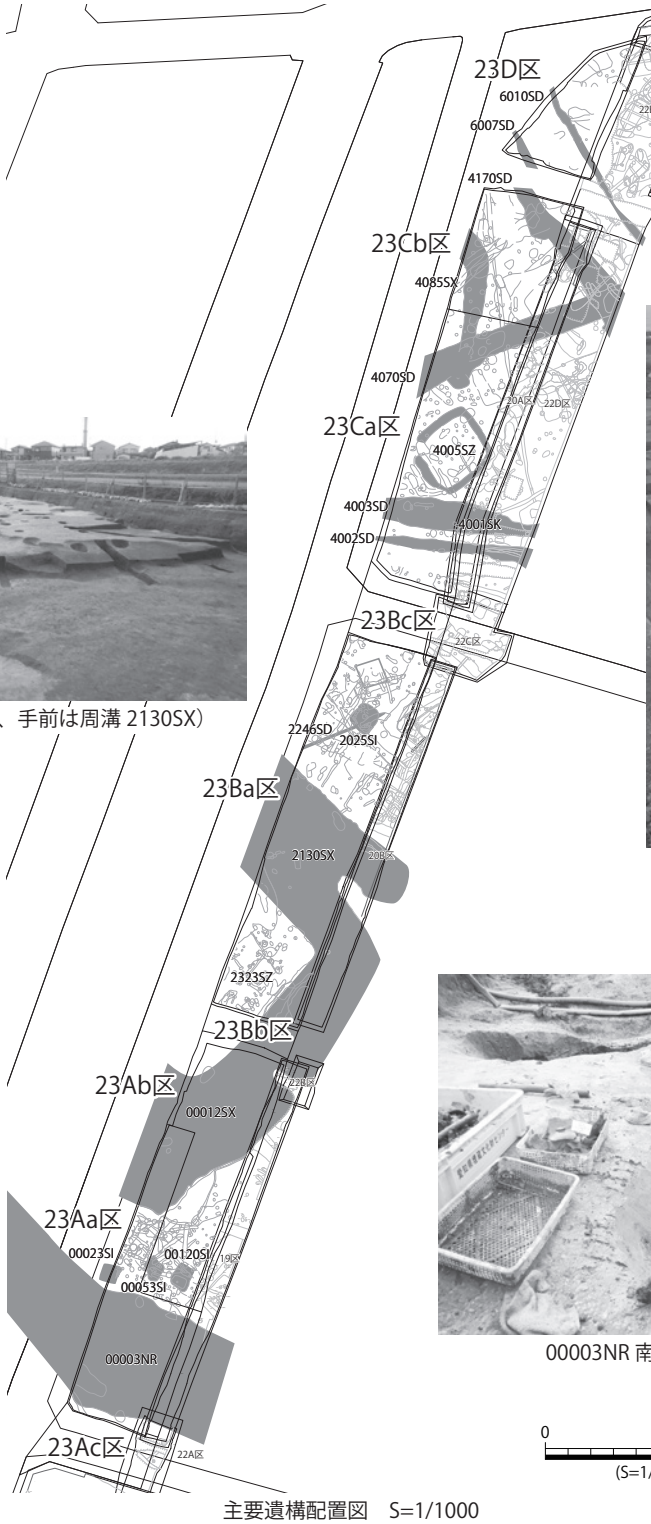
する溝状の遺構があり、23A区で外側、23B区で内側の屈曲部が確認され、コの字状を呈する。中央には基盤層を掘り残した高まりがあり、その上部には盛土層らしきものも認められる。23A区側は撹乱により明確でないものの、大溝を周溝、中央部の高まりを墳丘部と考え、方形周溝墓2323SZと呼称する。規模は周溝幅が北東側約13.3m、南西側約12.0m、南東側約9.9m、墳丘の北東―南西軸の想定長が約31.5mで、周溝の両端間長が約56.8mとなる。帰属時期は周溝出土遺物から弥生時代後期～終末期と推定される。　（河嶋優輝）

2323SZ（北東から、手前は周溝 2130SX）

2246SD（南西から）

00003NR 出土竪櫛

00003NR 南岸杭列（東から）



主要遺構配置図　S=1/1000

２３Ｃ区　23C区は、北側で幅6.0m以上の4070SD、北東隅では幅5.0mとなる4120SDが検出された。これらの溝は、23C区の東側に位置する。いずれも埋土中からは12世紀代の山茶碗類が散見できるが、これに前後する土器類も出土しており、帰属時期は若干の検討を要する。

4070SDと重複する4085SXは、幅2m程度の溝状の遺構だが、南端部は不整形となっている。埋土中からは弥生時代中期後葉の土器類がややまとまって出土している。

中央部では方形周溝墓4005SZが検出された。規模は一辺約7.0～7.5m程度で、主軸は45度程度東西に偏する。南東部には幅約1.0m程度の陸橋部を有する。北東溝と南西溝のほぼ中央からほぼ全形を残す弥生時代後期の高杯が出土している。

南側では中世以降となる4003SDと4002SDが、主軸を東西方向に向けて、ほぼ並行して展開する。なお、前者の基底部から検出された4001SKからは、遠賀川系土器の壺の大型破片も出土している。

２３Ｄ区　23D区は、C区で確認された4120SDに連続すると思われる6007SDを、南西隅で検出している。埋土や出土遺物は4120SDと類似する。

中央には大規模なドーナッツ状の攪乱が存在する。平成10年度に埋文センターが実施した、鉄塔の移設に先立つ発掘調査に関連する旧鉄塔の撤去痕と思われる。遺構検出面が残存する中央部分では、6007SDと主軸が一致する幅0.8m程度の6010SDを確認するが、出土遺物も乏しく詳細は不明となる。なお、22D区と22E区からは6010SDに連続すると思われる溝が検出されている。

２３Ｅ区　23E区は、22E区、22F区の西側となる細長い調査区となる。中央部から検出された8030SKは、長径0.7m、短径0.5mの楕円形の土坑で、弥生時代中期後葉の太頸壺が埋設されており、土器棺墓と考えられる。太頸壺は焼成後穿孔による円窓付土器が使用され、穿孔部を上面とし、斜め方向に埋設されていた。口縁部と穿孔部には別個体の土器底部片を被せて蓋としている。なお、市道を挟んだ23E区の北側は中狭間遺跡となり、市道を挟んだ北側が22A区、その西側は23A区となるが、8030SKと近接する位置からはほぼ同時期の土器棺墓が22A区で1基、23A区で4基検出されている。このエリアには中期後葉の土器棺墓により構成される墓域が展開していた可能性も考えられる。

（池本正明）

調査区遠景 東から

23A 区 00003NR 中層の自然木堆積状況（西から）

23Ba 区全景（上が西北西）

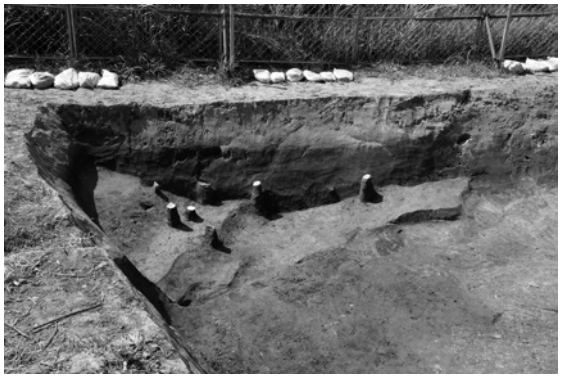
23Cb 区全景（南から）

23Cb 区 4050SZ（南から）

23Cb 区 4050SZ 出土状況 1（北から）

23Cb 区 4050SZ 出土状況 2（南から）

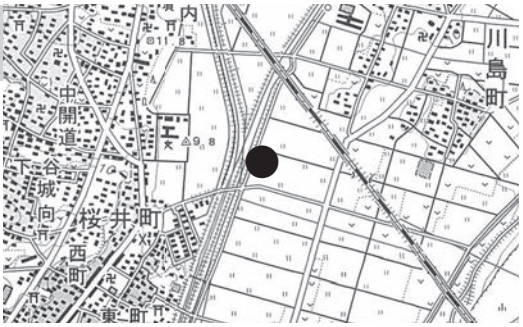
23E 区 8003SK 上面（南から）


23D 区 6007SD（東から）

23E 区 8003SK 下面（南から）

中狭間（なかはざま）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　安城市桜井町・川島町地内
（北緯34度55分05秒　東経137度05分53秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（一級河川鹿乗川）
調 査 期 間　令和5年9月～令和6年1月
調 査 面 積　1,550㎡
担　当　者　堀木真美子・河嶋優輝・池本正明



調査地点（1/2.5万「安城」）

調査の経過　調査は愛知県建設部による鹿乗川改修工事伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託を受けて行った。調査区は横断する農道と排水路を切り回す都合上、南から順に、23A 区～ 23C 区として設定された。

立地と環境　遺跡は鹿乗川流域遺跡群（北群）の一部を構成し、亀塚遺跡の北側に接する。地形的には碧海台地東側縁辺に位置する沖積低地中の微高地で、地表面の標高は約 8.3m である。

調査の概要　本年度の調査区は、昨年度の調査区の西側に接する。検出された遺構は弥生時代中期後葉～弥生時代終末期、平安～鎌倉時代にまとまりが確認できる。

23A 区の主な遺構は、方形周溝墓 1 基と土器棺墓 4 基である。このうち、方形周溝墓である 0131SZ は、昨年度調査区で検出されている 22A 区 131SZ の西側部分に該当する。本年度の調査によりその全形を確認し、一辺約 11.0m の規模となる。北側が陸橋部となり、幅は約 1.5m をはかる。出土遺物は、弥生時代中期後葉と終末期に大きく二時期に区分できる。前者に構築され、後者に再構築されたものと考えられる。なお、北西溝中央部の基底部からは、弥生時代終末期の高杯数個体分の破片がまとまって出土しているが、杯部の内面に赤色顔料（水銀朱）の付着が観察できる。また、土器棺墓（0030SZ・0040SZ・0050SZ・0060SZ）は、いずれも弥生時代中期後葉で、0131SZ の南側に集中する状況が確認しており、土器棺墓の分布域が限定されている可能性も指摘できる。

23B 区の主な遺構は、方形周溝墓 3 基と溝 1 条となる。まず方形周溝墓から概観する。0130SZ は昨年度調査区で検出されている 22A 区 130SZ の西側に該当する。本年度の調査によりその全形を確認し、一辺 6m 程度のやや不整形な隅丸方形となる。西側が陸橋部となり、幅は 0.8m 程度をはかる。新たに確認された方形周溝墓は、0141SZ と 0150SZ で、前者は規模一辺 9.0m、後者は西側が調査区外へと伸びるが、一辺は 7.0m 程度と思われる。次に、0133SD は、後期前葉に掘削され、3 回程度掘り直されながら、終末期まで存在する溝で、幅 1.5m 程度となる。方形周溝墓群の中央を突き抜けて北西から南東へと伸び、北西端部は調査区外、南東は 22A 区を貫き調査区外へと伸びる。なお、0131SZ の北東溝と、0141SZ の南西溝がこれと接する。015SZ に近接した位置からは、ミニチュア土器がまとまって出土しており、特徴的となっている。

23C 区の主な遺構は、竪穴建物 4 棟を確認した。出土遺物は乏しく、いずれも時期は特定できないが、遺構の分布状況などは、東側に接する 22C 区と類似している。

なお、全ての調査区で幅 0.4 ～ 1.0m 程度の溝が 10 条程度確認されている。主軸は北西から南東となる。出土遺物は乏しいが、いくつかの溝から若干の山茶碗片が出土しており、おおむね平安～鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

（池本正明）

23B 区 0141SZ(南から）

23A 区 0030SZ(西から）

23A 区 0050SZ（南から）

主要遺構の分布（航空写真を合成））▶

万瀬（まんぜ）遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向字マンゼ
（北緯35度06分43秒　東経137度33分54秒）

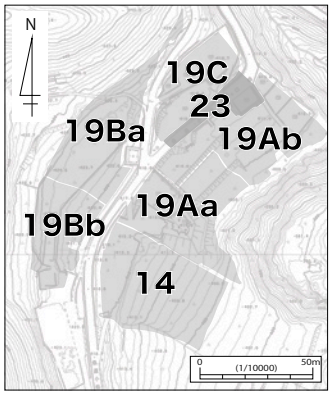
調査理由　設楽ダム

調査期間　令和5年6月～8月

調査面積　500㎡

担当者　鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業である。令和5年6月から8月にかけて実施した。



調査区位置図

立地と環境　遺跡は豊川支流の一つである境川右岸に所在し、丘陵末端の緩斜面上に立地する。今年度の調査区は県道432号小松田口線道路直下の位置にあたり、調査面積は500㎡で設定された。調査区の調査前の標高は412～415mを測る。

調査の概要　調査は中世から近世の遺構を中心とする上面、縄文時代早期前半を中心とする下面の２面に分けて行われた。

中世以降　上面では中世から近世を中心とした遺構が調査区全体に展開しており、主な遺構として、土坑墓2基、鍛治関連の遺構が挙げられる。

3115SZは調査区の東端に位置する楕円形の土坑墓で、人骨や煙管、鉄製品、灰釉摺絵鬢盥が出土した。一方、調査区の西端に位置する隅丸方形状の土坑墓3018SZでは歯や人骨、副葬品として小玉、鉄製品、寛永通宝、煙管等が出土した。3115SZと3018SZから出土した骨はどちらも焼けていないことから土葬であったことがわかる。

調査区の東端に位置する平坦面からは鍛治関連の資料がまとまって見つかった。3081SLは、焼土を多く含む地床炉と思われる遺構である。また、3074SKと3085SKからは鉄滓が、3004SKと3109SKからは多くの炭化物が出土しており、周囲にピットなどもあることから、この平坦面は鍛治関連の活動を盛んに行った場であったと考えられる。

また、上面では調査区の東側から岩偶岩版類が出土した。形状は長円形、長さ4.3㎝、厚さは2.2㎝あり、中央に深く溝が1条、上部に6条の細い横線が刻まれている。岩偶岩版類は縄文時代のものであるが、恐らく、中世から近世の造成によって混在したと考えられる。

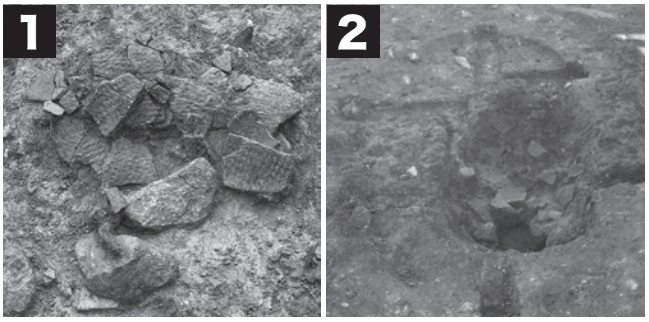
下面では縄文時代早期前半を主体とし、主な遺構として、竪穴建物跡や煙道付炉穴、遺物包含層が確認された。

縄文時代早期前半　19C区を調査した際に今年度の調査区である23区にまで範囲が及ぶ、竪穴建物跡が5棟重複した形で確認されていた。本調査では31171SI、3118SI、3135SI、31150SI、計4棟の竪穴建物跡が確認された。

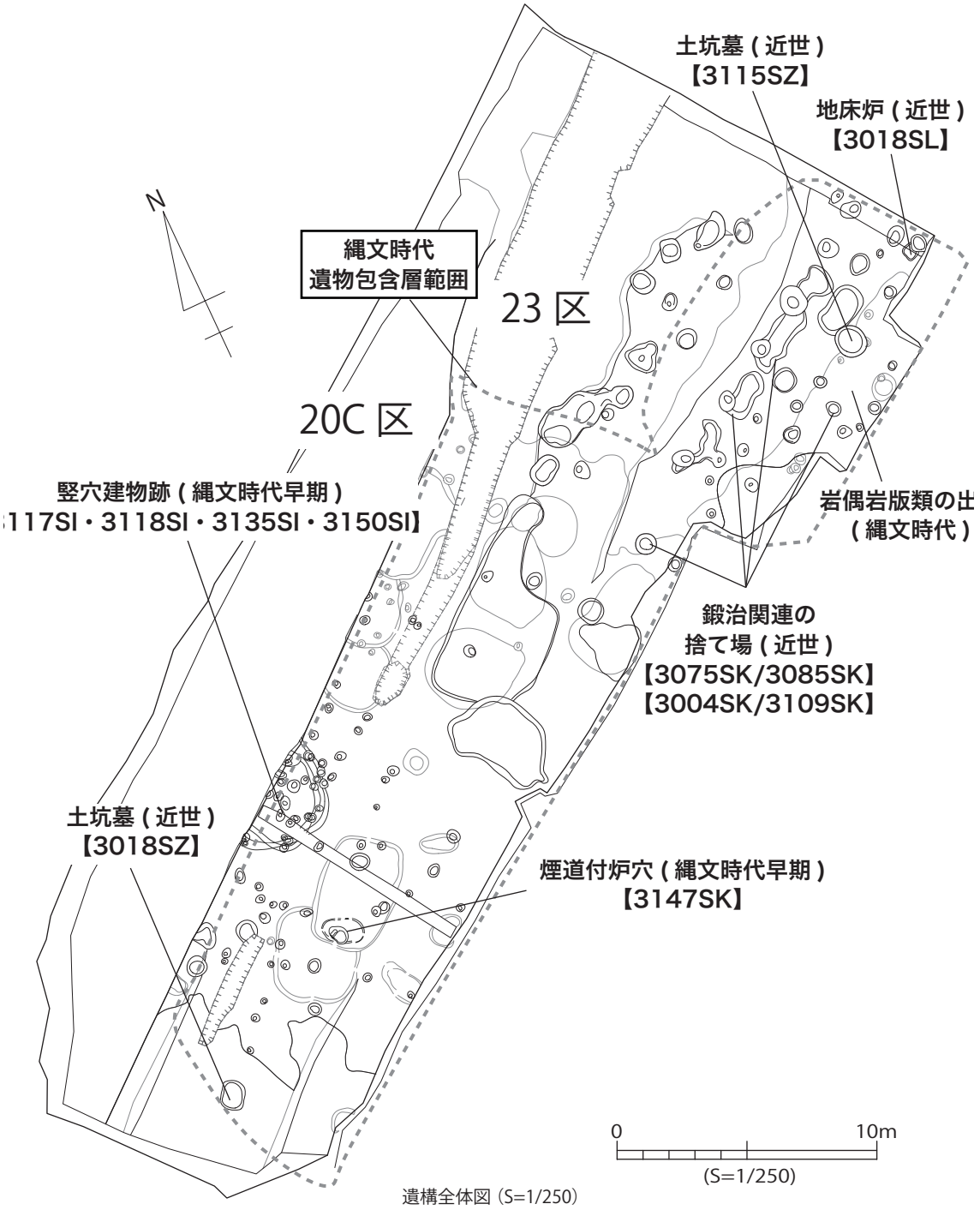
3147SKの煙道付炉穴内には石器、押型文土器や撚糸文土器の土器片が形状がわかる状態で出土した。炉穴内の埋土は二層になっていることから、複数回にわたって何度も使用していたことが考えられる。

(荒木徳人)

3018SZ 土坑墓 (南から)

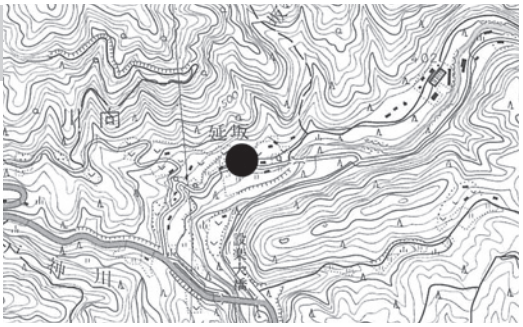


3147SK 煙道付炉穴　1 . 遺物の出土状況 (北から) 2 . 全体図 (西から)



遺構全体図 (S=1/250)

上ヲロウ（かみおろう）・下ヲロウ（しもおろう）遺跡（本発掘調査B）

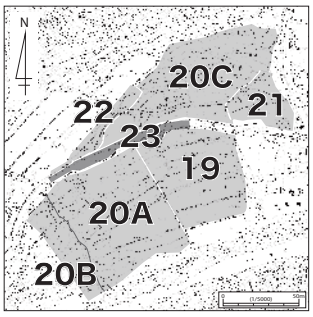


調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分51秒 東経137度34分05秒）
調査理由　設楽ダム
調査期間　令和5年5月～7月
調査面積　580㎡
担当者　鬼頭剛・川添和暁・荒木徳人

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として令和5年5月から令和5年7月にかけて実施した。

立地と環境　遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んでおり、緩斜面は度重なる扇状地堆積(土石流堆積)の累積によって形成されている。今年度の調査区は県道432号小松田口線道路直下に位置し、調査面積は580㎡で設定された。調査区の調査前の標高は、396～403mを測る。



調査区位置図

調査の概要　調査区の東端は20C区および19区でも確認されている谷地形がのびており、調査区の西側に向かうにつれて、地形の高まりが確認された。本調査区では谷地形より西側にかけて中世から近世の遺構が展開しており、主な遺構として土坑墓２基、建物跡、道状遺構、柵列跡4条が挙げられる。

土坑墓　6006SZは楕円形の土坑墓であり、埋土は土坑墓の底面から粘土質の土壌の上に径10cm程度の礫が埋め込まれている状態であった。6006SZの底面付近から寛永通宝、煙管、銅鏡、毛抜き等の鉄製品、繊維製品、灰釉摺絵鬢盥が出土した。銅鏡の裏面には流水紋と江戸時代の鏡師である藤原の銘が施されていた。灰釉摺絵鬢盥は扁平な筒状の形状をし、表面には摺絵で紋様が施されており、瀬戸美濃窯産のものであると考えられる。

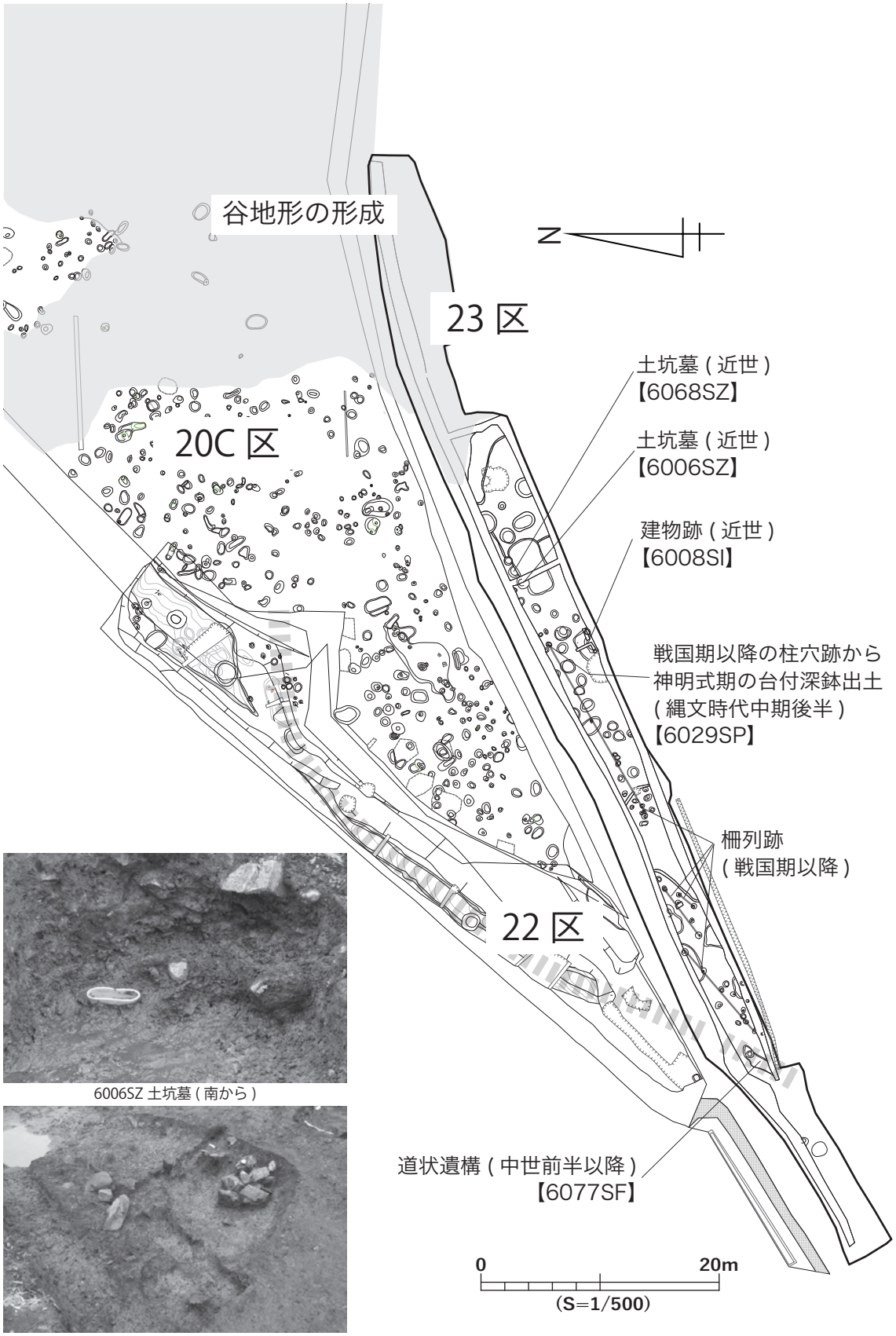
6006SZ に隣接した場所に位置する6068SZは近世以降の整地や耕作により、土坑墓の一部が滅失していたが、残存している形状から楕円形であると考えられる。この土坑墓の底部からは寛永通宝、鉄釉丸碗が出土した。鉄釉丸椀はほとんど完品の状態で出土しており、高台部以外にはツケガケが施されている。

道状遺構　調査区の西側では中世前半以降の道状遺構に伴う整地層6077SFが帯状に残存しており、22年度調査区の道状遺構と繋がるように展開していた。

建物跡　6008SI内では建物跡と思われる落ち込みが重複した形で確認された。遺物は近世の擂鉢片や鍋片、被熱を受けた金床石が出土しており、これらの遺構は近世の段階で鍛治関連の作業場として使われていたものと思われ、建物も重複した建て替えが行われていたと考えられる。

神明式期台付深鉢　また、6029SPから縄文時代中期後半の神明式期の台付深鉢の台部分が出土した。遺構の年代は戦国期以降のものであるが、20年度調査C区でも縄文時代中期後半の活動痕跡があることから紛れ込んだものであると考えられる。

(荒木徳人)



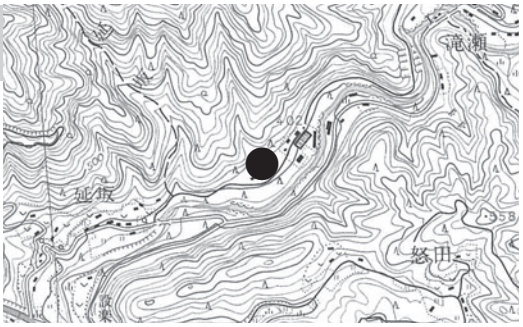
6006SZ 土坑墓 (南から)

6008SI 建物跡 (北から)

調査区全体図 (S=1/500)

しものべさか 下延坂遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　北設楽郡設楽町川向字上延坂・下延坂
（北緯35度06分58秒 東経137度34分28秒）
調 査 理 由　設楽ダム
調 査 期 間　令和5年９月～10月
調 査 面 積　920㎡
担　当　者　鬼頭　剛・川添和暁・荒木徳人



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じて委託を受け、令和5年9月から10月にかけて実施した。調査面積は920㎡で、調査対象地は町道79号道路敷に当たり、調査区は北から順に、23Aa区、23Ab区、23Ac区、23Ba区、23Bb区の５か所を設定した。

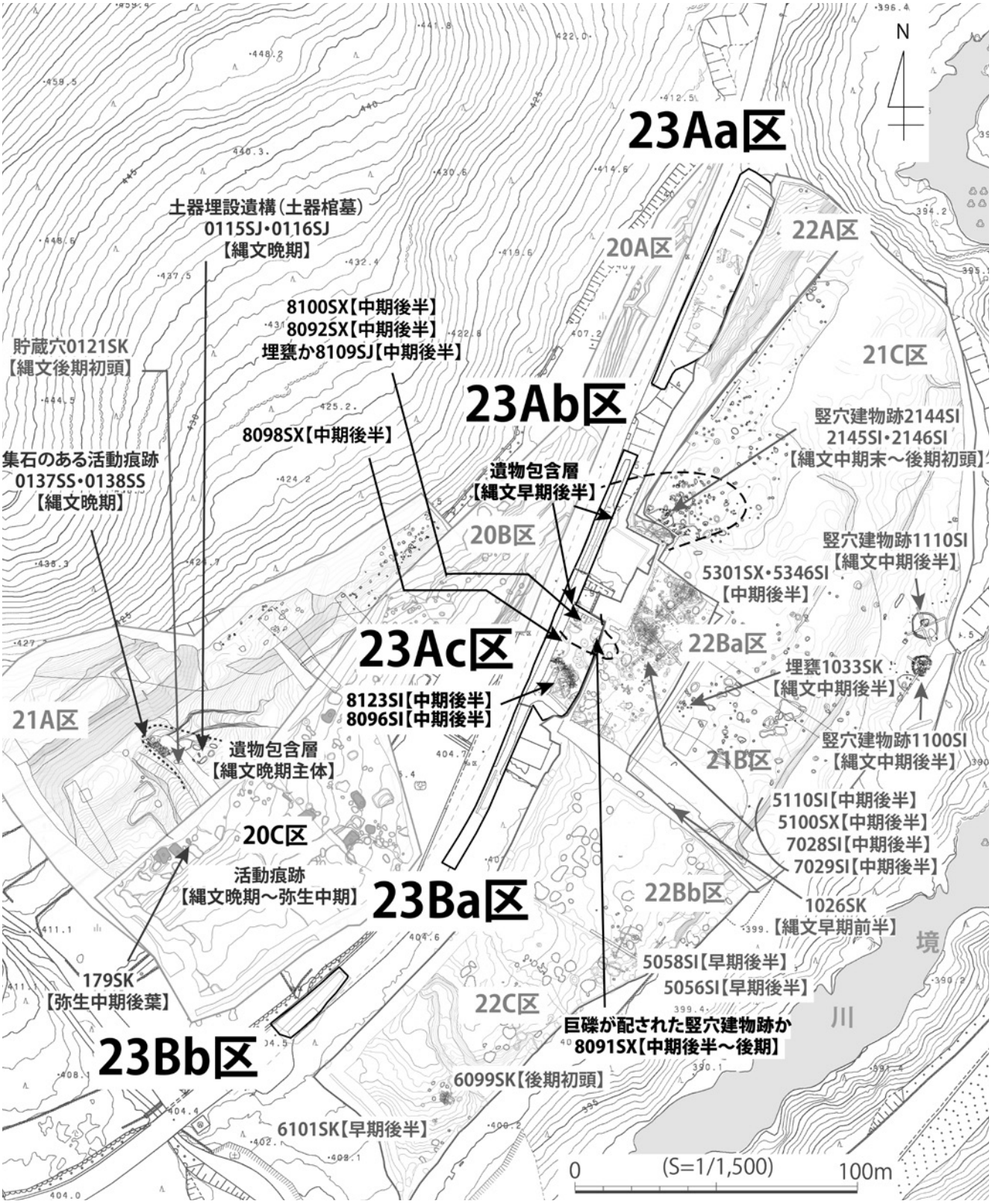
立地と環境　下延坂遺跡は境川右岸の河岸段丘から山麓の丘陵斜面に立地する遺跡である。町道79号は遺跡範囲中央を北東から南西に向かって貫く形となっており、北西から南東方向へと境川に向かって傾斜する地形の変換点に当たる。かつての調査区の位置関係は、以下の通りである。23Aa区は20A区および22A区の間に、23Ab区は20B区と21C区の間に、23Ac区は20B区と22Ba区の間に位置する。また23Ba区は20C区と22Bb区の間に、23Bb区は20C区と22C区との間に位置する。

調査の概要　基本層序は23Ac区西壁の土層断面情報が参考になる。上からⅠ層：表土・盛土・灰褐色粘土（道路整地層、旧耕作土１、120cm）【近代以降】、Ⅱ層：灰褐色粘土（旧耕作土２、80cm）【近世】、Ⅲ層：灰褐色粘土（旧耕作土３、40～60cm）【戦国期～近世】、Ⅳ層：黒褐色粘土（遺物包含層、60cm）【縄文時代中期～中世】、Ⅴ層：茶褐色の砂礫層（土石流堆積層、20cm）【縄文時代前期か】、Ⅵ層：灰褐色粘土質シルト層（水成堆積層・遺物包含層、20cm）【縄文時代早期後半】、Ⅶ層：一部砂礫を含む黄褐色粘土・シルト層、である。地形は、23A区から23Ab区に向かって傾斜している一方、23Ba区ではⅤ層の堆積が厚くなり、地形的高まりが形成されていた。各調査区の調査成果は、下表の通りである。

項目＼調査区		23Aa 区	23Ab 区	23Ac 区	23Ba 区	23Bb 区
堆積層	Ⅰ	○	○	○	○	○
	Ⅱ	○	○	○	○	○
	Ⅲ	○	○	○	○	×
	Ⅳ	×	?	○	×	×
	Ⅴ	○	○	○	○	○
	Ⅵ	×	○	○	確認できず	確認できず
	Ⅶ	○	○	○	確認できず	確認できず
検出遺構		耕作地	耕作地	耕作地・竪穴建物跡４・土坑・ピット	耕作地	谷地形・耕作地
出土遺物		弥生土器片	縄文土器・石器	縄文土器・石器	縄文土器・石器	縄文土器

最も良好に保存されていた23Ac区では、Ⅱ層上面、Ⅲ層上面、Ⅳ～Ⅴ層上面で調査を実施し、最後にⅥ層の範囲を確認した。Ⅴ層上面では、縄文時代中期後半に属する竪穴建物跡を４基調査した。本調査区内では炉石が残された状態での石囲炉跡は検出されなかった。8091SXでは、掘り方隅で一列に配された巨石群を検出した。竪穴建物跡の構造の一部であったと考えられる。

（川添和暁）



下延坂遺跡 調査区全体図

23Bb区 全景(南から)

23Ba区南半分（南から）

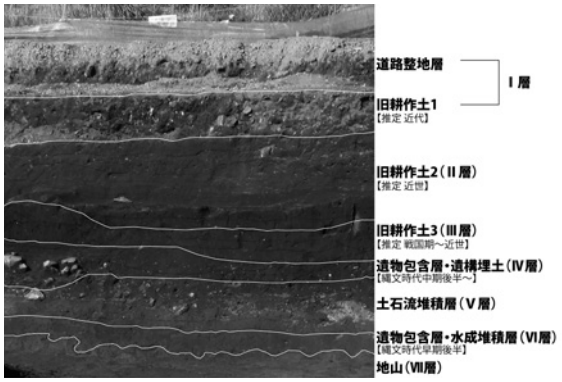
23Ac区近世耕作地 全景(北から)

23Ac区戦国期～近世耕作地 全景(北から)

23Ac区 縄文時代遺構全景(上が西)

23Ac区 8091SX(南から)

23Ac区 8123SI(北から)



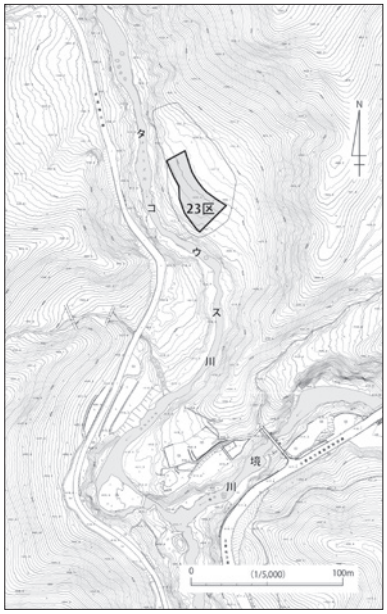
23Ac区西壁 土層断面

根道外遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「田口」）

所　在　地　北設楽郡設楽町八橋字根道外
（北緯35度07分23秒 東経137度34分42秒）
調 査 理 由　設楽ダム
調 査 期 間　令和5年11月～令和6年1月
調 査 面 積　825㎡
担　当　者　鬼頭 剛・川添和暁・荒木徳人

調査の経過　調査は国土交通省中部地方整備局による設楽ダム工事関連事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託を受け、令和５年11月から令和６年１月にかけて実施した。調査面積は825㎡で、調査対象地は遺跡範囲の南西側に設定された。

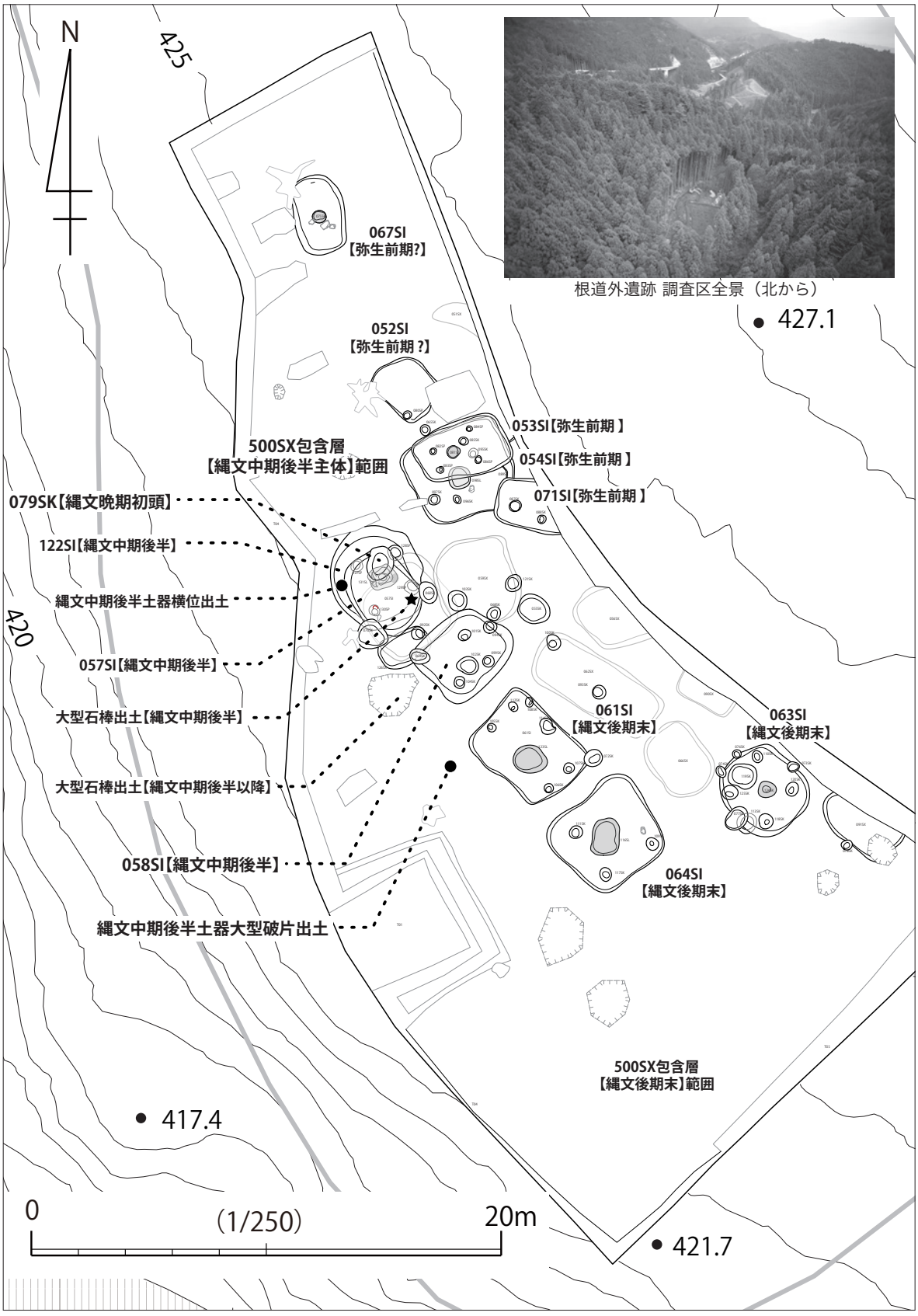


下延坂遺跡 調査区位置図

立地と環境　根道外遺跡は、境川とタコウズ川との間に形成された細尾根の北東から南西に向かって延びる緩斜面上に立地する。遺跡は北から東側にクランクして流れるタコウズ川の左岸にあり、調査前の地表で標高は420～426mを測る。当地は、境川とタコウズ川の合流点「べんてんぶち」から北に約300mの距離に位置している。遺跡北・東・南の各側には片麻岩由来の尾根筋によって遺跡全体が囲われている形となっており、緩傾斜の高まりは、このなかで北東から南西方向に向かって流れ込んだ土石流堆積によって形成されている。

調査の概要　基本層序は調査区南壁の土層断面情報が参考になる。上からⅠ層：表土（5cm）、Ⅱ層：灰褐色粘土（旧耕作土、20～30cm）【近世以降】、Ⅲ層：赤褐色礫層（土石流堆積層１、80cm）【古墳～古代】、Ⅳ層：灰褐色粘土（遺物包含層、20cm）【縄文時代中期～弥生時代中期】、Ⅴ層：赤褐色の砂礫層（土石流堆積層、20cm）【縄文時代前期か】、Ⅵ層：にぶい褐色粘土質シルト層（水成堆積層、20cm）【縄文時代早期以前か】、Ⅶ層：赤褐色礫層（土石流堆積層３、厚さ不詳）【縄文時代早期以前か】、Ⅷ層：黄褐色粘土・シルト層および黄褐色砂礫層【地山】、である。地形全体は北側が高く南側に向かって低くなっており、調査区中央で堆積状況に変化が認められる。すなわち、調査区北側半分では、Ⅴ層～Ⅶ層の堆積がなく、Ⅳ層下に、低位の地山層である黄褐色砂礫層が露出する。この黄褐色砂礫層は河床景観を呈するもので、旧タコウズ川が開削されて現在の位置に固定する前段階の河床であったと考えられる。

戦国期～近世　調査は、Ⅲ層上面での検出面（検出１）と、Ⅳ層～Ⅴ層上面での検出面（検出２）で調査を実施した。検出１では、耕作地跡が調査区全体で検出された。この面では、調査区外東側をも含めて中世～戦国期の陶器片が表面採集されたことから、少なくとも戦国期以降には、Ⅲ層の堆積後に地盤が安定し土地利用が活発化した可能性がある。今回の調査では、戦国期と直接的に特定できる遺構の検出はなかった。また、耕作地跡は近世～近代に属す



根道外遺跡 調査区全景（北から）

調査区全体図【縄文時代・弥生時代】

るものと考えられる。

縄文～弥生　検出２では、縄文時代中期後半から弥生時代の遺構・遺物が調査された。さらに以下の３時期に分けることができる。

縄文時代中期後半　縄文時代中期後半の活動痕跡は、調査区中央部付近でまとまって見つかっている。主要遺構には、竪穴建物跡３基がある。058SIは一辺４m弱の隅丸方形プランを呈しており、中央に大型の土坑、四隅にはピットと思われる遺構が確認されている。出土遺物は少なく、中期後半の大型土器片が遺構底面から出土した。057SIと122SIは重複して確認された遺構である。057SIは４×３mほどの隅丸方形プランを呈するもので、底面中央には焼土の広がりを確認するとともに、南東端では石に囲われて大型石棒が横位状態で出土した。この石棒は埋土の堆積が進んだ段階で、土坑が掘られて埋設されたもので、大型石棒はもともと立てられていた可能性もある。122SIは掘り方底面から5～10cm上面に板石が敷かれた痕跡があり、床面が更新された痕跡であると考えられる。この床面更新の埋土中からは、縄文時代中後半の深鉢が一個体横位状態で出土した。また、本来はこの面で築かれたと考えられる石囲炉跡も見つかっており、北西隅には副炉が設けられていた。西側斜面下方に向かって、遺物包含層500SXを検出した。深鉢大型破片などが見つかった。

縄文時代後期末　縄文時代後期末～晩期の活動痕跡は調査区南側が主体で、中央にも局所的に確認された。竪穴建物跡３基と土坑が調査された。竪穴建物跡の中で、061SIは５×４mの隅丸方形状の竪穴建物跡で、地床炉跡内から土器片がまとまって出土した。また、062SIは５×５mほどの隅丸方形状の竪穴建物跡で、遺構掘り方に対して、中央には炉跡に由来する焼土の塊が盛り上げるように検出された。おそらく本来は同じ場所に掘り方を共有する竪穴建物跡の床面が上位レベルに存在していたものと考えられる。057SIに重複する形で、土坑079SKが築かれていた。埋土には焼土塊と礫が多量に含まれており、炉跡の構造物などが一括廃棄された可能性が高い。西側斜面下方に向かって形成された遺物包含層500SXからは、土器片や打製石斧などの石器のほか、有溝石錘や石棒が出土した。

弥生時代前期　弥生時代前期の活動痕跡は、調査区北側が主体である。竪穴建物跡５基が調査された。特に良好な状態で見つかったのは、053SIと054SI、067SIで、いずれも掘り方中央に地床炉跡とおぼしき焼土範囲が確認された。053SI・067SIは４×３m程度、054SIは５×４m程度である。いずれの炉跡も脇から板石などが見つかっており、炉縁石であった可能性が高い。053SIと054SIからは、条痕文土器の中でも、特に大型壺片が散在して出土していた。

（川添和暁）

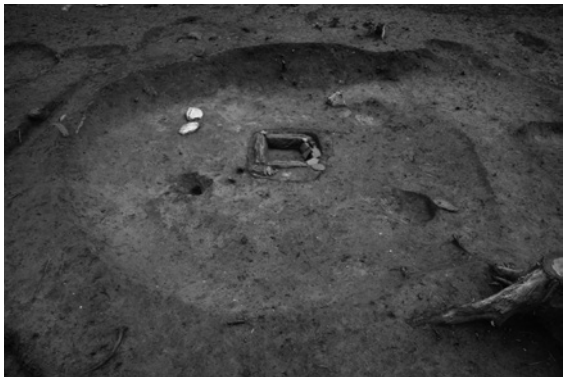
根道外遺跡 23 区　調査成果一覧

段階	調査層位	時期	検出遺構	出土遺物	備考
検出１	Ⅲ層上面	戦国期以降	耕作地跡（水田区角）20 以上	縄文土器・石器・山茶碗・天目茶碗など	調査区西端で調査された500SX（遺物包含層）は、傾斜地での層位認識の誤りのため、「検出１」で調査を実施した。
検出２	Ⅳ層およびⅧ層上面（調査区北側） Ⅳ層およびⅤ層上面（調査区南側）	縄文時代中期～弥生時代中期	○縄文時代中期後半【竪穴建物跡３・ピット・土坑・遺物包含層】 ○縄文時代後期末～晩期【竪穴建物跡３・土坑・ピット・遺物包含層】 ○弥生時代前期～中期【竪穴建物跡５・ピット】	○縄文時代中期【土器・石器（石鏃・剝片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）・大型石棒】、 ○縄文時代後期末～晩期【土器・石器（石鏃・打製石斧・剝片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）・有溝石錘】 ○弥生時代前期～中期【土器・石器（剝片石核類・磨石敲石類・石皿台石類）】	

竪穴建物跡057SI内 大型石棒(北東から)

竪穴建物跡122SI内土器出土状況（南から）

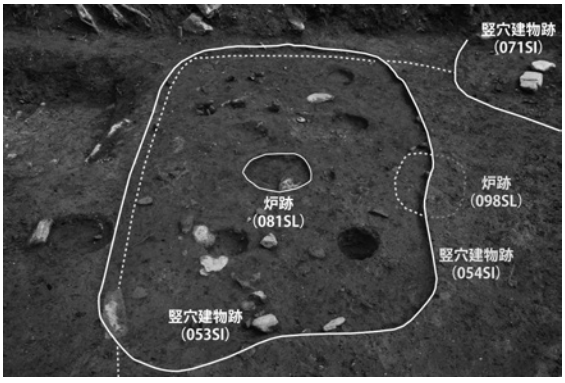
竪穴建物跡122SI床面検出１(北から)



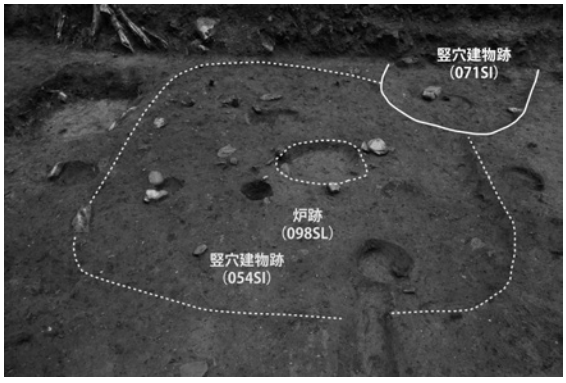
竪穴建物跡122SI床面検出２(西から)

竪穴建物跡061SI 炉跡内遺物出土状況(北西から)

竪穴建物跡064SI炉跡検出状況（南西から）



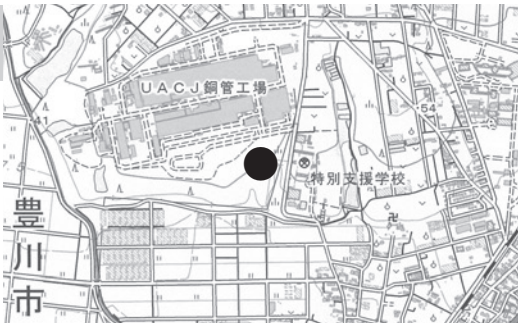
竪穴建物跡053SI・054SI・071SII(西から)



竪穴建物跡054SI・071SI(西から)

花の木北遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　豊川市大木町新道
（北緯34度51分34秒　東経137度24分48秒）
調 査 理 由　一般国道151号（一宮バイパス）
調 査 期 間　令和5年5月～7月
調 査 面 積　375㎡
担　当　者　樋上 昇・田中 良



調査地点（1/2.5万「新城」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課による一般国道151号(一宮バイパス)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡では令和3年度に2,110㎡、令和4年度に1,355㎡の調査が行われており、今年度は令和4年度調査区の北東に隣接する375㎡の調査区が設定された。

立地と環境　遺跡は豊川市の北部にあり、旧宝飯郡一宮町に該当する。遺跡の立地は、西原台地と呼ばれる本宮山山麓から広がる扇状地の末端に位置する。小規模な谷を挟んだ南側には、令和2年度に調査された花の木古墳群・花の木遺跡がある。花の木遺跡では弥生時代中期～後期の集落跡、花の木古墳群では古墳時代中期前半を中心とする古墳群が確認されている。

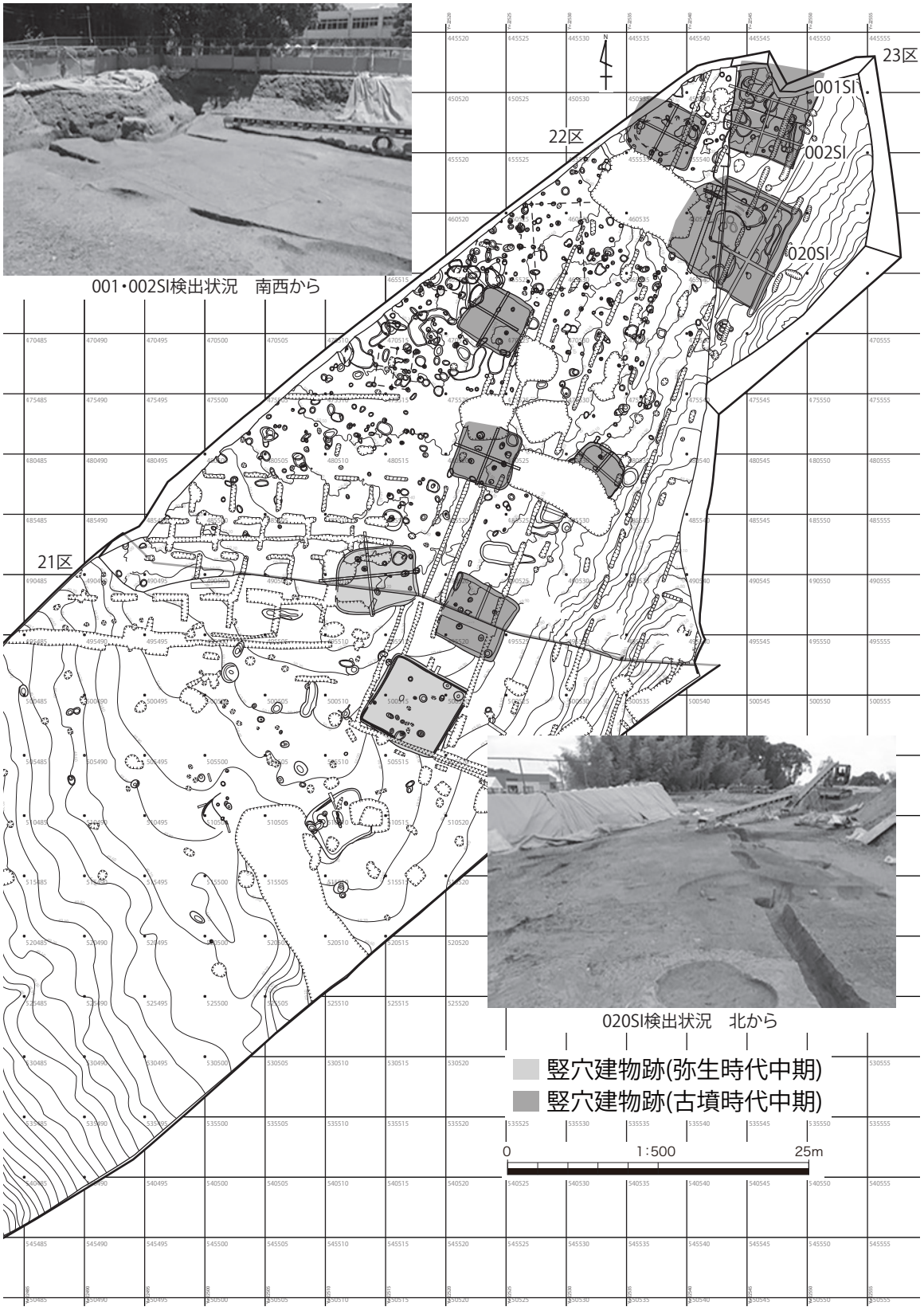
調査の概要　今年度の調査は、令和4年度調査区の東側に隣接する。今回の調査では、令和4年度と同様、古墳時代中期の竪穴建物跡が3棟検出されたほか、土坑や溝も検出された。また、遺構のほとんどが調査区の西側で検出されており、東側に向かって谷状地形となることから、本調査区が集落の東側縁辺部に相当することがわかった。

古墳時代中期の竪穴建物　今回検出された竪穴建物跡は、北端で2棟重複して検出され、その南側では大型の竪穴建物跡が検出された。北側の竪穴建物跡は、後世の削平を受けており掘方の一部しか残っておらず、遺物も少量であった。一方、南側の竪穴建物跡では、後世の削平以外に中世以降に土坑が形成されており、それらによって床面まで掘り返されていた。そのため、遺物はあまり出土していないが、壁溝と考えられる溝から小型壺の完形品が出土している。

(田中　良)

遺跡全景　東から

001・002SI検出状況　南西から



020SI検出状況　北から

遺構全体図 (S=1/500)

野添（のぞえ）遺跡（本発掘調査B）

所　在　地　豊橋市石巻本町地内
（北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒）
調 査 理 由　道路改良工事(交付金（主）東三河環状線
調 査 期 間　令和5年8月～10月
調 査 面 積　960㎡
担　当　者　樋上 昇・田中 良

調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局道路建設課による道路改良工事（交付金）（主）東三河環状線に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡は平成25年度に2,000㎡の調査が行われ、令和4年度は、高位の段丘上を4,055㎡の調査を実施した。今年度の調査は、令和4年度調査区22C区の西側にあたる、960㎡を調査した。

立地と環境　遺跡は豊川左岸の河岸段丘縁辺部に立地し、東側には神田川沿いの低地がある。調査地点は河岸段丘上に位置し、平成25年度調査地点は低地および段丘崖にあたる。遺跡の周辺には、神田川沿いの低地に弥生時代中期から後期、中世を主体とする東下地遺跡がある。

調査の概要　今回の調査では、隣接する22C区と同様な区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が検出された。また、掘立柱建物跡は12棟確認され、区画溝の南西からは素掘りの井戸が検出された。出土遺物には、大量の内耳鍋片や土師皿などの土師器、天目茶碗などの陶器片、磁器片、鉄滓などがあり、時期は15世紀末から16世紀が主体となる。

２　３　区　23区からは、22C区の北西から西へ伸びる区画溝の続きとなる20SD・30SDと区画された屋敷地内で掘立柱建物跡が12棟検出された。また、本調査区は遺構の残りが良好で、表土から遺構検出面までは約30cmである。中には、遺物包含層から掘り込まれる遺構もあり、堆積状況も良好であった。23区では、22C区の区画よりも若干古い15世紀末の遺物が出土しており、17世紀前半の遺物がほとんど出土していないのが特徴的である。また、一番古い区画溝の底面からは、15世紀末の土師器皿が出土している。さらに、柱穴や土坑からは天目茶碗や稜皿、青花端反皿など22C区よりも多彩な遺物が出土している。

２０ＳＤ　今回の調査区で検出された区画溝は、屋敷地の北西を区画する溝で、22C区の区画溝と同様、幾度も掘り返されており、20SDはその中でも一番新しい区画溝である。この区画溝は、西側は深さ約50cmになるが、南側へ屈曲する部分は約10cmと急激に浅くなり、また東側で約30cmの深さとなる。南側へ屈曲する部分が屋敷の出入り口に相当するか。しかし、特に構造物のようなものは確認できていない。出土遺物は、内耳鍋のほか土師器皿が多く出土している。また、硯の破片が1点出土している。

区画溝の中でも一番古い区画溝460SDの底面からはロクロ成形の土師器皿が出土しており、屋敷地の開始時期は15世紀末と考えられる。

ＳＢ０１　根石を伴う掘立柱建物跡(SB01)は23区北西部で検出された。SB01を構成する柱穴のうち、50・55・56・76・77・78・92SPの底面に拳大～人頭大の亜角礫が検出された。時期は、周囲の遺物から16世紀頃と考えられる。

ＳＢ０２　礎石を伴う掘立柱建物跡(SB02)は、23区北側から検出された。SB02を構成する柱穴のうち、47・49・91・227SPの埋土中から人頭大の亜角礫が検出された。SB01と違い、柱穴

根石をもつ掘立柱建物跡01(SB01)

遺構全体図 (S=1/300)

の底面ではなく埋土中から板状の亜角礫が検出されたため、礎石と考えている。

ま と め　今年度の調査では、22C区よりも多くの掘立柱建物跡を含む柱穴群と新たに井戸21SEが検出された。また、柱穴や区画溝から出土した遺物は、22C区よりも古い15世紀末から16世紀のものが主体である。さらに、多彩な陶磁器や硯などからも今回の調査区が屋敷の中心により近いことが伺える。このことから、屋敷地は西側に中心があり、何度も建て替えながら、徐々に東側へと広がっていったことが分かった。

(田中　良)

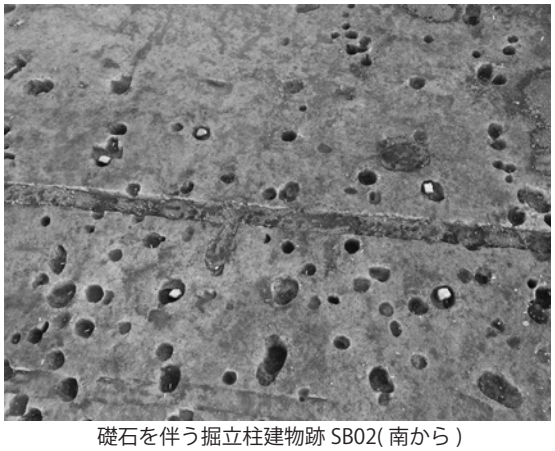
調査区全景 (南から)

区画溝 20・30SD 土層断面 (東から)

区画溝 20SD　硯出土状況 (北から)

区画溝 20SD　遺物出土状況 (西から)

井戸 21SE 土層断面 (南から)


礎石を伴う掘立柱建物跡 SB02(南から)